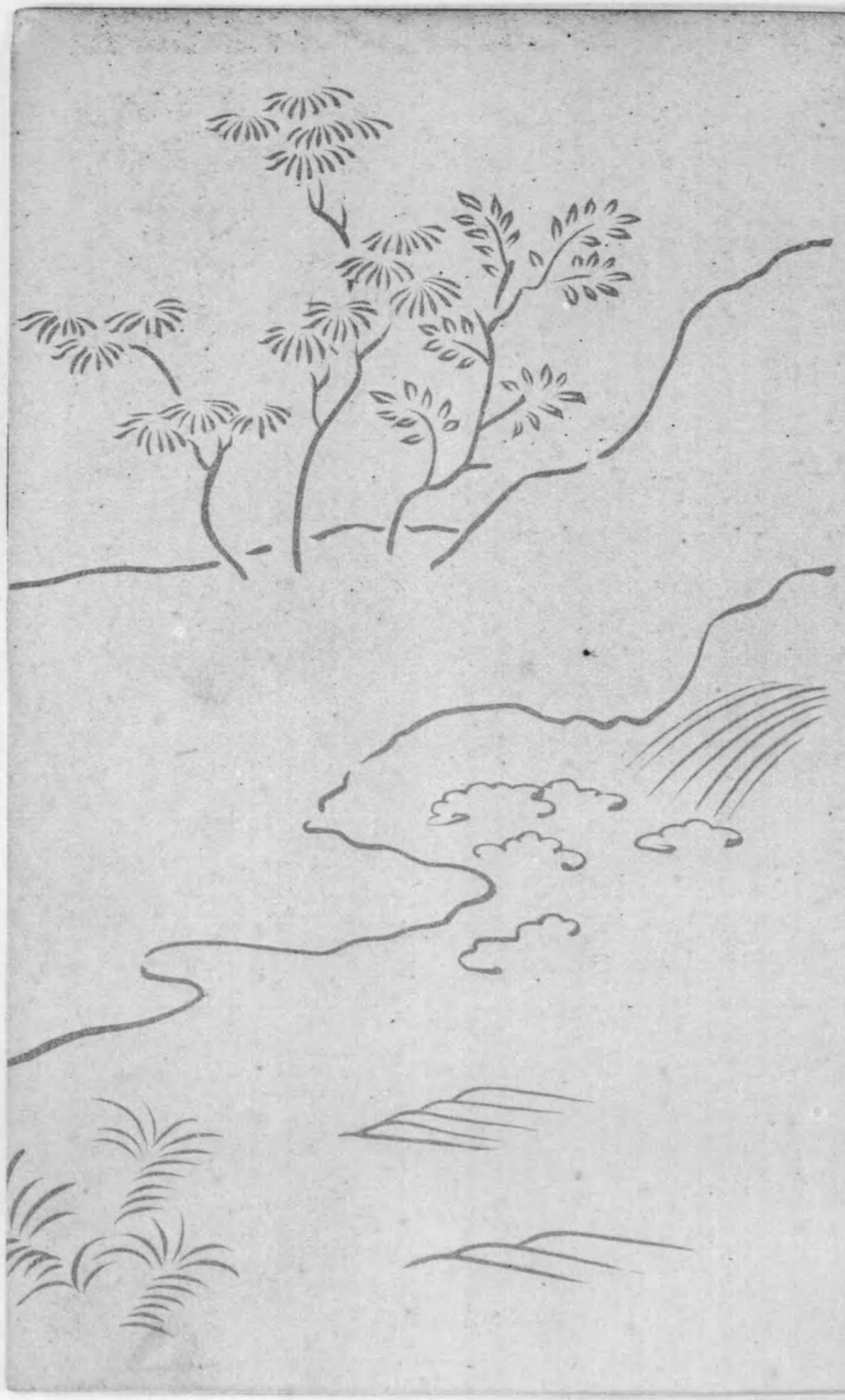
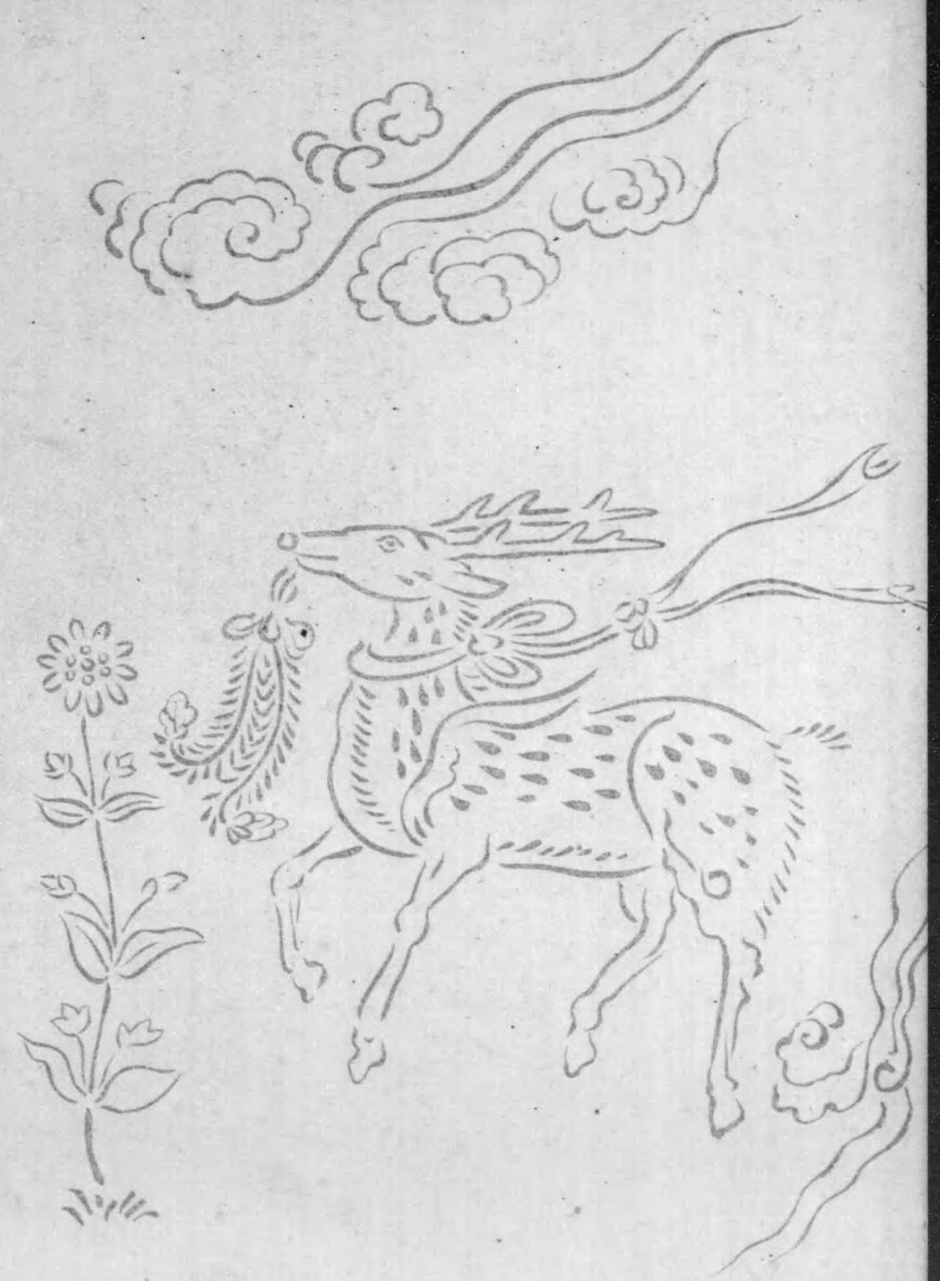
328
372

始





歷代御製集

二

大正
4. 6. 1
内交

歷代御製集 二

目次

卷五
土御門天皇……一
卷六
順德天皇上……百十七
卷七
順德天皇下……二百五十五
卷八
後堀河天皇……三百七十五
後嵯峨天皇……三百七十七

後深草天皇……四百四十六
龜山天皇……四百四十七

歴代御製集卷五

土御門天皇

詠述懷十首和歌　合點詞家隆卿

寄風述懷

續古今集詞書「題中、吹風とよませ給ひける、第四句「しのぶもくるしの」とあり」に作る、

吹く風のめにみぬかたを都とてしのぶもくるしゆふぐれの空

先うちみ候より已に落涙かきくらし候畢、善惡すべて不覺候へども、心詞無申限歟、

寄月述懷

雲居よりやどりなれにしそでの月いかにかはれる涙とか見る

續古今集第三句「秋の月」第五句「涙とか知る」に作る、

是又凡夫更々淺心難及候歟、

寄雪述懷

いとゞまた跡なき庭となりぬらむはらふ人なき雪のふるさと

めでたく候に無字二所に候、書失候歟、

寄曉述懷

曉の鳴のはねがきかきもあへじわが思ふことの數をしらせば

又こゝろふかくすがた不レ及二左右一候歟、

寄夕述懷

續後撰集詞書「曉の心を」に作る、

夕暮のなからましかばしら雲のうはのそらなる物はおもはじ

初五字より心もめづらしく姿もおろかならず候、

寄海述懷

續古今集詞書「夕の心を」に作る、

あま小舟とふ人あらば藻鹽たれみなみの海にわぶとこたへよ

意よりはじめて姿詞は本歌もつよくめでたく候、

寄山述懷

岩がねの枕はさしもなれにしになにおどろかす松のあらしぞ

うるはしくかざる所なくよろしく候、

寄河述懷

行く水にかずはかきてきならし河おなじ流をいくせわたると

此河仔細定候歟、又優美に候歟、

寄野述懷

かゞみのやたが僞の名のみしてこふるみやこの影もうつらず

同前、

寄關述懷

續千載集第三句「なれにしを」に作る、

夫木抄第一句「須磨の浦や」第三句「摩はして」に作る、

須磨の浦いはうつなみの音はして人をとゞむる關はなかりき

十首すべて心詞高無中限候、注進猶事淺く候、

詠百首和歌　承久三年

春

立春

氷とく志賀のうらかぜ吹くまゝに波とともにや春はたつらむ

秋よりもなほ春波たよりをえて立ちまさり候歟、

子日

春の野のはつねの松の若葉よりさしそふ千代の影は見えけり

子日の歌には一句一字おろかならず候、但さりとては此中には可爲御地候歟、

霞

萬代集第一句「伊勢の海や」第三句「夕霞」に作る、

伊勢の海のあまのはらなる朝霞そらに鹽やくけぶりとぞみる

餘勢姿心たくみに無申限候歟、

鶯

霧にむせぶ山のうぐひす出でやらで麓の春にまよふころかな

山のうぐひす心尤よろしく候、

若菜

しろたへの袖にまがひてふる雪のきえぬ野原に若菜をぞ摘む

うるはしく一句無難優美に候、

殘雪

霞み行くひばらは今やくもるらむ小松がはらの雪のむらぎえ

梅

植ゑおきし梅の園生やあれぬらむにほひもよそのふる里の春

これ又まことにしのびがたきさまに優美に見え候歟、

柳

さほひめのてだまもゆらによる絲やみどりになびく春の青柳

一句無相違尤よろしく候、

早蕨

早蕨のもゆる春日となりしよりたるみの水もいはそゝぐなり

同前、但釋阿入道法皇の御時百首に「さわらびもいまはをりにやなりぬらむたるみの氷いはそゝぐなり」如此覺え申候、

櫻

急がれぬ花の比こそあはれなれなげきのもとに春はへぬれど

うちきゝたるより又涙にかきくらし候て物も不覺候、

春雨

淺みどりはつしほそむる春雨に野なる草木もいろまさりけり

心詞又無申限候歟、

春駒

いとゆふのおなじ名のみやまがふらむ霞のうちの野べの春駒

夫木抄第一句「いとゆふも」に作る、

野馬心優美に候歟、

歸鴈

かへるかり雲居はたれもなれしかどうらやましきは春の通路

心肝を動し無申限候歟、又落涙候、

喚子鳥

心あれやみ山のおくのよぶこ鳥さしもすむべき人もなきよに

この鳥にとり候てはいかゞかくは可思寄候、

苗代

苗代の田のもにはふるしめのをのしづみは沈むひく人はなし

又意すがたまことによろしく候にや、

夫木抄第四句「しづめばしづむ」に作る、

菫菜

紫の根はふよこのゝつぼすみれ春やゆかりのいろにさくらむ

釋阿の詠に「むらさきのねはふよこのゝつぼすみれま袖につまむ色もむつまじ」

杜若

やつ橋のくもでになびくかきつばた昔の花のなごりとぞ見る

藤

藤の花おなじ枝ごとに咲きしよりまた一しほの松ぞうつろふ

此三首地には少し過ぎ候歟、但藤は今少し勝り候歟、

歇冬

おもひやる井手の山吹さかりにも都にすまばあはましものを

此山吹いかなることにか候らむ、本歌も此ために詠み

おき候ひけるにやと落涙候ひし、猶々無申限歟、

三月盡

春と夏とゆきあふさかの關守もこよひは鳥の音や惜しむらむ

是又心姿をはじめて連句などに申候べしとも不覺悟候、

夏

更衣

時しらですすぐすうき身のかひもなくけふとて花の衣かへめや

又詞をいたはらず幽玄に候歟、

卯花

このごろもをちかた人やとがむらむ白くぞ咲ける里の卯の花

無難神妙に候へども以前に申候ひし可爲御地候歟、

葵

神路山かけしたのみのあふひ草二葉よりこそかざしそめしか

是又日出度候に此神路山は他社にはよみて候へとも不覺候、西行と申候ひしが、大神宮にはじめて詠み候て後少々詠み候歟、神山は常事に候歟、

郭公

時鳥まつ山の端に月は出でぬたがたのめたるこよひならねば

菖蒲

人しれぬ袂にねをばかけしかどけふぞあやめの色に見えける

早苗

みなかみにたがさなへとる末ならむながれてにごる谷川の水

照射

ますらをが立田の山にともしすとひとりあかせば長き夏の夜

二首可ㇾ爲ㇾ地候歟、

五月雨

さみだれのふるき思のはれずして眺むるかたは山の端もなし

盧橘

むかしをば花たちばなにしのびてむ行く末をしる袖の香もがな

二首尤よろしく候、中に猶「行く末をしる袖の香」少しまさりて候歟、

螢

あしま行く夜半の螢やうつるらむ波のそこなるいさり火の影

蚊遣火

蚊遣火の煙はよそのおもひかはながめにくもる夏のゆふぐれ

蓮

はちす葉の露のしらたまみがくれてにごりにしまぬ夏の池水

三首地に少々候らむ、

氷室

ひむろ山せきいれし水のおとたえて氷のうへに夏ぞおぼめく

可ㇾ爲ㇾ地候歟、

泉

せき入れし岩間の水のかげすみて底にもむすぶ袖は見えけり

六月祓

みそぎする袂にふるゝおほぬさのひくてあまたになびく河風

二首尤よろしく候歟、

秋

立秋

かぞふれば涙の露もとゞまらずこれやみそぢの秋のはつかぜ

又例の不覺の涙にむせび候畢、

七夕

わがいのるねがひの絲のとしをへてあはでしもやは秋の七夕

高たかく實にたのもしく聞え候歟、

萩

くだら野のふるえの萩の花みれば今年ばかりの秋としもなし

女郎花

ふるさとやあれゆく庭の女郎花あるじがほにもすぐす秋かな

各可ㇾ爲ㇾ地候歟、

薄

さゝがにのうら葉にすがくいとすゝき亂れにけりな秋の夕風

面白く候にこのいとすゝきはいと詠みならひ候はず候歟、いとゞさる同前、

苅萱

たがたびの草の枕と定めねどむすぼゝれたる野邊のかるかや

蘭

ふぢばかまきつゝなれ行く旅人のすそ野のはらに秋風ぞふく

荻

荻の葉にたれかおもひのむすぼゝれ夕暮ごとの露とおくらむ

三首心詞もとり〴〵にすがた宜しく候歟、

早鴈

かたしきやまだひとへなるさよ衣かりがねさむし庭の松かぜ

かへり高候歟、

鹿

みづぐきのをかのむら萩うちなびき鹿の音ながら秋風ぞ吹く

末の句ことによろしく候、

露

白露にそぼつる野邊のから衣よる〳〵きぬるたびはなにぞも

霧

秋霧のたつくれごとにつまかくすやの丶神山みらくすくなし

二首又未學者不可詠出候歟、

槿花

色かへぬ竹のまがきの朝顔もおのれはあだの花にぞありける

地にはすこしすぎ候歟、

駒迎

望月（もるイ）のあきのひかりをさそひきて雲居の見ゆるひきわけの駒

尤よろしく候、

夫木抄第四句「雲居に見ゆる」に作る、

月

ひさかたの月の都のみちならばわたりてもみむかさゝぎの橋

擣衣

あさぢ原はらはぬ霜のふるさとにたれわがためと衣うつらむ

二首又意すがた無申量落涙候畢、

蟲

まくずはふあだの大野に啼く蟲もひとつうらみの秋の夕ぐれ

夫木抄第三句「なく鹿も」に作る、

菊

よそにゆく秋の日數はうつろへどまだ霜うとき庭のしらぎく

二首よろしく難思分めでたく候歟、

紅葉

下紅葉夜のまの露や染めつらむあしたの原のきのふよりこき

又詞おもしろく殊勝に候歟、

九月盡

大かたの秋になぐさむ思だにわが身ひとつとあすやなりなむ

是猶すこしまさり候らむ、無申限候歟、

冬

初冬

置きまよふ霜のした草かれそめて昨日は秋とみえぬ野邊かな

又不及左右姿めでたく候ともことおろかに候、

時雨

神無月みふねの山はしぐるれどいろにもそまぬ瀧のしらいと

無難候へども此めうつりに色すこしあさく候、

霜

いつまでかあさぢが末にはらふべき花をたづぬる野邊の初霜

すがた詞うるはしく優美に候歟、

霰

聞きわかぬまきの板戸の寝覺かな木の葉降る夜も霰ふる夜も

常風情なるやうには候へども詞つゞきをかしく候歟、

末句ことに面白く候歟、

雪

もゝとせの雪もけなくに風さえてまた冬ごもるみよしのゝ山

猶高まさり候らむ、よろしく候、

寒蘆

白露のおけば玉江のあしの葉にむすびかへたるふゆがれの霜

千鳥

松さむきみつの濱邊のさよ千鳥ひがたの霜にあとやつけくる

二首、おけば玉江、ひがたのしも、いかに候はむか不覺候、

猶候歟、

氷

谷河や氷のかくるしがらみのせくとはみえてはやきとしなみ

常人詠む風情に候へどもつゞきよろしく聞えて候、

水鳥

冬の池の浮寝の鴛鴦もうちはぶきげにさむげなる涙の音かな

末句をかしきさまに此すがたにとりていみじく聞え

候歟、

網代

橋姫の袂やいろに出でぬらむ木の葉ながるゝ宇治のあじろ木

はし姫いまはよみつきたる物に候、この風情いかでのこり候らむ、この心のこり候よ、

神樂

あめつちの神代のあきのしわざよりとるや榊の色もかはらず

神樂にとりて尤よろしく候、

鷹狩

はしたかのすゞの篠原かりくれて入日の岡にきゞすなくなり

景氣すがた詞あはれきら〳〵しく高も無申限候、末句おもしろく候、

炭竈

すみがまやいづくの里としらねども煙ぞほそきおほはらの山

煙の有樣にその里みわたし候事めづらしく候、觀多亦めづらしく候へども煙ほそしと申候事［　　］

爐火

冬の夜のながきおもひのたぐひとて下にもけたぬ埋火のかげ

心ふかく見え候歟、

歳暮

暮ると明くとなれしばかりの月日にて思出もなき今年惜まむ

よろしく候へども末句終すこしおとりてや候らむ、

戀

初戀

くれなゐのこぞめの衣ふりいでゝ心のいろをしらせつるかな

姿詞心相兼引はたらかすべからず候歟、

忍戀

我が戀はいはでの森の下草のみだれてのみもすぐすころかな

「いはでの森の下草」尤よろしくのこりて候歟、

新後撰集第五句「すぐるころかな」に作る、

不遇戀

蜑のきるまどほの衣あはでしもぬるゝは何のならひなるらむ

「ぬるゝは何の」よろしく候歟、

初遇戀

まよふべき末のしをりは知らねども今日ふみそむる戀の道芝

後朝戀

あかつきの涙ばかりをかたみにてわかるゝ袖をしたふ月かげ

續後撰集第四句「わかるゝ袖に」に作る、

艶によろしく候歟、

逢不遇戀

夢ならでまたやかよはむ白露のおきわかれにしまゝのつぎ橋

これはすこし劣り候にや、

旅戀

わかれてもいく有明をしのぶらむ契りて出でしふるさとの月

すこしまさり候にや、

思

みむろぎの神南備山のもゝえより繁きおもひぞ色に出でぬる

未學淺心者不可引動候歟、

夫木抄第三句「もゝ葉より」萬代集第四句「しげき思の」に作る、

片思

涙河我ゆゑとだにしらすげのますげのをごもよそに朽ちつゝ

恨

しほたるゝ袖こそあらめ蜑のすむ恨みよとてのみるめなりけり

又よろしく候、二首同心に「うらみよとてのみるめ」まさり候歟、

雑

暁

暁をうしとおもひしわれしもぞことしはいたく寝覺がちなる

今日はすでに昔となり候ひぬれどよるひる愚意しのびがたくわするゝ時なく候、さらに又かきくらし候、善悪も不被申候歟、

松

たかまどやあれのみまさる宮のうちに殘るむかしの庭の松風

また二首よろしく候へどもこれは後沙汰候歟、

竹

うきふしのしげき物から吳竹のかはらぬ色ぞつれなかりける

まことによろしく候、

苔

岩枕こけのさむしろうちはらひあだにもすぐすわが月日かな

意姿詞無申限候歟、又凡夫境界不可、

鶴

さよふけて鳴く音も悲し唐琴のしらべにかよふこのうちの鶴

兼本文尤宜しく候歟、

山

山ふかくすむにもよらぬ心かなつらき世をのみなほ忍びつゝ

心詞のかざらざるさまにて實に宜しく候、

河

あすか河さだまらぬよをわたりかね淵瀬となるも我が心かな

こゝろふかく首尾相應ありがたく見え候歟、

野

いなみ野や山もと遠く見わたせば尾花にまじる松のひとむら

いなみ野の夕景氣まさしく見る樣に候歟、心詞よろしく候、すみたるさまよもおろかならず候、

第五句續古今集「松のむらだち」雲葉集「秋の松原」に作る、

續古今集詞書「百首の御歌の中に關路を」第四句「あけてを越えむ」に作る、

關

鳥の音に猶山かげのくらければ明けてを出でむあしがらの關

二首心詞景氣又喩可申にて候はず、和歌はたゞ如此可候爲體歟、

橋

今日見れば跡もながらの橋柱たがいつはりぞつくりかふとは

をかしく候、宜しく候へど、

海路

明石潟やまとしまねも見えざりきかき曇りにし空のまよひに

かく候はぬだにも老のなみだかわくま候はず、かなしく思ひ給ひ候になか〳〵よしなく候事を拜見し候て

新千載集第五句「袖の涙に」に作る、

物も不覺候、

旅

白雲を空なるものとおもひしはまだ山越えぬみやこなりけり

此心詠殘し候ひける昔今歌仙遺恨に候歟、不可申盡歟、

別

しほたるゝ袂はひなのわかれてもつきぬ恨やあまのたくなは

又同前「しほたるゝ袂は」とて末に「つきぬ恨やあまのたくなは」いかに候事にか候らむ、

山家

世のうきにくらぶる時ぞ山里の松のあらしもすみよかりける

心詞又申しやるかたなく候、

新後撰集第三句「山里は」第五句「たへてすまるゝ」に作る、

田家

花を見てをちかた人のたねまきし山田のいほに秋かぜぞふく

こゝろ詞にこもりて高たかくめでたく候、

懷舊

うつりゆく昔も遠きおもひかな雲のうへよりなみのほかまで

「雲のうへよりなみのほかまで」心詞高およびつくすべからず候歟、かゝる事いかでか可候哉、

夢

夢ならぬうつゝもあらば宵々にうちぬる床はたのまざらまし

艶に心詞相叶ひてよろしく候歟、

無常

夫木抄第五句「人の行くらむ」に作る、

朝ごとにひまゆく駒をはやめつゝいかなる方へ尋ねゆくらむ

このすぢにとほりて又よろしく候歟、

述懐

うき世にはかゝれとてこそ生れけめことわり知らぬ我涙かな

うちつゞきあまりひまなく候間老候、

續千載集第五句「數もこもれる」に作る、夫木抄には第四句「かげには千代の」に作り順徳天皇の御製として載す、

祝

ちぎりても年の緒ながき玉椿かげに八千代のかずぞこもれる

祝心深くよろしく候、

詠二十首和歌　承久四年正月廿五日

四季日

春

みかさ山さすや朝日の松の葉にかはらぬ春のいろは見えけり

夏

庭のおもの土さへさくる夏の日にひとりつゆけき姫百合の花

秋

あかねさすおのが色にやそめつらむ入日向ひの岡のもみぢ葉

冬

冬がれの草葉にさわぐ日のねずみ昨日は今日になるぞ程なき

四首、暫心やすめ候はむひまに神妙に候ながら地と定め候畢、

四季月

春

時わかぬなみだに袖はおもなれてかすむも知らず春の夜の月

尤優美に候べし、

夏

あかで入る月のかたみに置くものは露よりさきの扇なりけり

心おもしろく候へど地と定め候畢、

秋

しきしまや山とびこえて啼く鴈のつばさあらはにすめる月影

無難よろしく候歟、

冬

たつた山もみぢやまれになりぬらむ河音しろき冬の夜のつき

おぼろげの人またよみいづべからず候、まことにあり

新後撰集第三句「來る雁の」に作る、

新後拾遺集第四句「河波しろき」に作る、

かたく見え給ひ候、

四季雨

春

よしの川いはとがしはにむす苔のかはらぬいろに春雨ぞふる

尤よろしく候、

夏

菖蒲生ふる沼の岩垣かきくもりさもさみだるゝ昨日今日かな

あはれかくつゞけ候ことはかなはず候物を高などこ

とに候はねどもこのすぢに候、最上品に候歟、

秋

夕ぐれはまがきをこむる桐の葉にその色となく時雨ふるなり

萬代集第二句「沼の入江の」に作る、

尤よろしく候、

冬

雪まぜに雨はふりつゝしかすがにこほりもやらぬ山川のみづ

このみぞれの心おもしろしく見る樣に候歟、

四季雲

春

花しらぬ朽木の枌もなかりけりしらくもかゝる春のあけぼの

又心詞をかしく高も候歟、

夏

ほとゝぎす鳴くや雲居の晴れずのみ思ふ心やそらになるらむ

又よろしく候歟、

玉葉集詞書「冬の御歌の中に」第五句「庭の松風」に作る、

秋

むらくものたえま〳〵に星見えてしぐれをはらふ夜半の秋風

まことにまさしく見るやうに覺え候、尤殊勝に候歟、

冬

冬の日は雲のみをにてはやければ流るゝ年のしがらみもなし

又同前に難分見え候、

四季風

春

氷とくかぜのやどりやこれならむ波になりゆく池のうきぐさ

此風のやどりめづらしく心詞よろしく候歟、

夏

たちやどるならの木蔭に風過ぎてゆふべ涼しき蟬の羽ごろも

秋

人とはぬあさぢが原の秋風にこゝろながくもまつむしの鳴く

二首とり〴〵に宜しく候歟、

冬

難波江やあまのころものうら風にかれたる蘆の音のさびしさ

心詞すがた「あまのころものうら風」めづらしく候、

續後拾遺集第五句「音ぞさびしき」に作る、

詠五十首和歌

春

春風春水一時來

時わかぬあらしも涙もいかなれば今日あら玉の春を知るらむ

あはれけだかくめでたく候ものかな、

春入枝條柳眼低

さほひめのいとよりかくる青柳の枝もたわゝに春は來にけり

鴈返爐峯頂北霞

嶺こえて秋こし道やまよふらむかすみの北にかりも啼くなり

是はすこしおとりてや候らむ、

白片落梅浮澗水

ながれくむそでさへ花になりにけり梅ちる山のたにがはの水

よろしく候、

樹根雪盡催花發

木のもとの雪はやゝ消ぬあしびきの山の櫻よはやも咲かなむ

暖雨晴開一徑花
はるさめの野邊のふる道露しげみ濡れて色こき花ざくらかな

鶯聲誘引來花下
うぐひすのさそふ山邊にあくがれて花の心(所に)もうつるころかな

遊絲繚亂碧羅天
大空に誰が織りなせるくれはどりあやに亂るゝ野邊の絲ゆふ

紛々花落門窓閉
風に散る山ざくら戸のさしもやは人目まれにて春をおくらむ

五首又心詞姿不及中善惡候、

紫藤花下漸黃昏
藤波の花のゆふばえしをるなよ(リィ)明日よりのちの春のかたみに

夏

初着單衣支體輕
久かたのあまの羽衣まだきねどかくこそ今日の風は待つ(吹くィ)らめ

一聲山鳥曙雲外
横雲のをちかた山のほとゝぎす聲よりのちの夜半ぞすくなき

盧橘子低山雨重
誰が袖のなみだとかまたしのぶべき花たちばなの雨のした露

綠樹陰前逐晚凉
まだ青きはゝその杜の夕かげに鳴くもすゞしき蟬の羽ごろも

螢火亂飛秋已近
小笹原しのにみだれて飛ぶほたる今いく夜とか秋を待つらむ

五首又とり〴〵に心詞宜しく候、勝劣難申候、

秋

窓中海月初知秋

住吉の千木のかたそぎもる月のゆきあひの影に秋は來にけり

耿々星河欲曙天

七夕もしばしやすらへ天の河あくるもおのがかげならぬかは

二首秀逸體不及申仔細候、

寒露已催鴈北至

はつがりのきこゆる夜半のしら露や寢覺はじめの涙なるらむ

遠壁暗蛩無限思

閨ちかき壁の底なるきり〴〵すおもひくらべの秋ぞへにける

二首をかしきさまのすがたに候歟、

蟬鳴黃葉漢宮秋

ならの葉の名におふ宮の薄紅葉そむるや蟬のなみだなるらむ

月穿疎屋夢難成

あれまさる床の月かげうちはらひ夢によがれてあかす比かな

南樓月下擣寒衣

おもひやるこゝろを月になぐさめて夜寒の衣うちもたゆまず

菊爲重陽冒雨開

長月やおのがころとて咲く菊のつゆもとをゝに雨はふりつゝ

霜草欲枯蟲思苦

すゞ蟲のこゑふるさとのあさぢ原たゝかれねどもおける初霜

林葉蕭々一夜霜

秋の色は一夜ばかりの初霜にうつろひはつる木々のもみぢ葉

六首又同前に候、無申量候、いかにかくのみ候にか、あさましく候、

冬

紅葉添愁正滿階

散りつもる紅葉に橋はうづもれて跡たえはつる秋のふるさと

御地に候歟、猶過ぎ候て事さび優り候、

鳥雀群飛欲雪天

雲居ゆくつばさもさえて飛ぶ鳥のあすかみゆきの故郷のそら

末句ことにおもしろく候歟、

寒流帶月澄如鏡

いほさきのすみだがはらの川かぜにこほりの鏡みがく月かげ

よろしきさまに候歟、

蘆花風起暮潮來

みしま江や蘆の葉ちかくみつ汐のほなみにかよふ冬の川かぜ

夫木抄第四句「ほなみやかよふ」に作る、

晚過千山雪氣寒

夕ぐれの山のしら雪ふみならしたちかへるべき跡はつけてき

二首又殊勝に候歟、

戀

與君後會知何日

たのめおく明日の命もしらなくにはかなきものは契なりけり

雪月花時最憶君

おもかげも絶えにし跡もうつりがも月雪花にのころころかな

故情歡喜開書後

たまづさやかきとゞめけるあと見れば昔にかへる人の言の葉

三首又尤宜しく候歟、

分秋二年似夢寐

夢かとよわかれし袖のなみだよりふた秋かけて露のかわかぬ

何呪鷄鳴卽須別

きぬ〴〵のわかれやさてもかなしきと曉しらぬ鳥の音もがな

二首又落涙不可思議の事に候歟、

雜

續古今集詞書「曉戀を」に作る、

柴扉日暮隨風掩

夕づく日さす人もなさしばの戸にあるじがほにも吹く嵐かな

草堂深鎖白雲間

谷ふかき草のいほりのさびしきは雲のとざしのあけぼのゝ空

二首殊勝難分申候歟、

月入斜窓曉寺鐘

鐘の音にいくありあけをうれふらむ寢覺がちなる窓の月かげ

是も無術候歟、

野寺訪僧歸帶月

法の師にまどへる道をたづねてぞ野寺の月にひとりかへりし

ことに景氣もあはれにたへがたく見え候歟、

續後拾遺集第五句「あけがたの空」に作る、

嶺猿群宿夜山靜
獨すむみ山の夜半の淋しさはげにわびしらにましら啼くなり

孤舒宿時風帶雨
時雨ふるこよひばかりの木枯にやどはなくともころもかせ山

世間飄泊海無邊
かぢをたえ大海の原に行く舟の跡はかもなき身をいかにせむ

玉葉集第五句「世をいかにせむ」に作る、

三首とり〳〵によろしく候、

雲愛山高且暮歸
わがごとや朝夕はれぬものやおもふたかまの山のよその白雲

莫對月明思往事
袖の月に昔の秋なおもひ出でそそれゆゑにこそ影もやつるれ

往時渺茫都似夢
むなしくてみそぢの夢はすぐしきぬ老の寢覺も今よりやせむ

白髮鏡中慚易老
よそに見し野原の霜のいかにして鏡のうちにおきはじめけむ

毎夜座禪觀水月
むねの月心の水もよな〳〵のしづかなるにぞ澄みはじめける

五首殊に銘心肝候、無申量候、

但有泉聲洗我心
影すめる岩間の清水さはりおほみわが心をしあらひつるかな

御地に過ぎ候歟、

碧落無雲稱鶴情

雲はるゝ空に聞えて鳴く田鶴もよその思ひはいふかひぞなき

但有雙松當砌下

我も知り我も知られて年は經ぬみぎりに植ゑしふたもとの松

二首不思議に思ひ給ひ候、

詠三首和歌　承久四年八月十五夜

月前松風

いづれともわかれぬ秋のけしきかな月にならぶるみねの松風

月前旅宿

月ゆゑと出でし都のわかれかはこよひぞ秋はさやのなかやま

月前久戀

ちぎりても空ゆく月のいくめぐりむなしき秋を過し來ぬらむ

三首又殊勝に候、

詠二十首和歌　貞應元年十二月三日

花三首

山ざくら思ひたえせぬ花の上にいたくなふれそ春のうぐひす

いそのかみふる野の花に言とはむかゝるなげきやありし昔も

心詞姿二首又落涙、

あぢきなく惜しともいはじ山櫻かたおもひなる風もこそ吹け

末句無術體候歟、

郭公二首

聞く人のそでしの森のほとゝぎすなれ故しげき露としらずや

是おもしろく候、然而又思寄事に候歟、

時鳥あやめのくさのゆかりあらば我が袂なる音にもなかなむ

殊勝に候歟、

月四首

たなばたの稀にあふ夜の月よりや心づくしのかげもそふらむ

こゝろづくしの月もかくこそ候べけれ、いかに人不二思寄一候らむ、

大井川しもはかつらの月かげにみがきておつる瀬々のしら波

末句きよげにきこえ候歟、

新拾遺集第五句「瀬々のしら玉」に作る、

眺むるに物思ふ事のなぐさまば月になれたる身とやなりなむ

本歌にいたくかはらずや候らむ、仍不二合點一候、

心もて入らむだにこそ惜からめ月のあなたはうちしぐれつゝ（るめりイ）

よろしく候、

雪五首

ふもとには雪げの風をさきだてゝみ山の松ぞしろくなりゆく

見る樣に覺え候、宜しく候歟、

さゝの葉にふる初雪のあさごほり消えぬがうへに霰たばしる

うちはらふ羽がひの雪の寒き夜はつがはぬ鴛ぞ寢覺がちなる

二首をかしき御事に候歟、

雪ふればまたも咲きけり冬がれの山したのべの尾花くずばな

今朝はまたたれ跡つけて通ふらむ雪もてわたす木曾のかけ橋

二首殊勝におもしろく候、まさりて候歟、

戀六首

新千載集詞書「不逢戀の心をよませ給うける」に作る、

いもにこひわかの浦松うらみてもつれなき色に年ぞ經にける

凡夫はなれゆゝしく候歟、

秋田なるかびやがけぶり下もえに思ふとは知れ跡はなくとも

戀をのみしづのをだまきいやしきもおもひは同じ涙なりけり

二首無難宜しく候歟、

朽ちにけりひる時もなきかたしきの涙の下のとふのすがごも

是は劣地候歟、

信濃なるあさまの山のあさからぬおもひのすゑぞ煙ともなる

ことによろしく候、

いも待つと山のしづくに立ちぬれてそぼちにけらしわが戀衣

高ことがらゆゝしく候、

夫木抄第二句「かすみは今朝や」に作る。

詠五十首和歌　貞應二年二月十日

春

林變容輝宿雪紅

くれなゐのかすみに今朝やにほふらむ雪のはやしの春の初花

高心姿實に難有候歟、

露暖南枝花始開

春の日のひかりに匂ふ梅の花みなみよりこそつゆもおきけめ

是又宜しく候、

鑽沙草只三分許

秋はまたわくべき道となりやせむみどりみじかき庭のわか草

氣霽風梳新柳髮

春きぬとつげのをぐしもさゝなくに柳の髪をけづるはるかぜ

心姿とり〴〵に無申限候歟、

舊巣爲後屬春雲

白雲をおのがすもりと契りてやみやこの花にうつるうぐひす

めづらしきさまに候へどもすこし劣り候歟、

江霞歸浦人煙遠

あじ火たく難波の浦の夕けぶり浪路へだてゝかすむころかな

林中花錦時開落

立田山花のにしきのぬきをうすみ咲くか散るかに迷ふ春かな

落花狼藉風狂後

花さそふ木の下風の吹くまゝになほ時しらぬゆきぞみだるゝ

三首又尤宜しく候、同前に候歟、

山腰歸鴈斜牽帶

立ちかへる雲居の鴈をおびにせる山のすがたぞ春はさびしき

春情難繫夕陽前

夕づく日かすみのしたにかたぶきて入相の鐘に春ぞのこれる

二首いますこしさがりて見え候歟、

夏

竹亭陰合偏宜夏

ときはなる陰しげりあふさゝたけの大宮人のそでぞすゞしき

高尤よろしく候、

花薫紫麝凱風程

誰がそでの匂を風のさそひきて花たちばなにうつしそめけむ

谷静鶯聞山鳥語

あしびきの山ほとゝぎすしのぶなり卯の花かこふ谷の一むら

まことによろしく聞え候、

松高風有一聲秋

松かげや身にしむほどはなけれども風にさきだつ秋の一こゑ

不是蟬悲客意悲

夏ふかき杜のうつ蟬音にたてゝ鳴くこのくれは我さへぞうき

二首劣り候歟、

秋

風從昨夜聲彌怨

昨日より夜半の松風おと立てゝ恨みぞ添ふるあまの羽ごろも

炎氣剩餘衣尚重

蟬の羽のうすき衣もなほおもし秋の日かずもなれぬこのごろ

曉露鹿啼花始發

わがやどの庭の秋萩さきそめてこのあかつきの露ぞうつろふ

竹風鳴葉月明前

おとづるゝ夜半の嵐や更けぬらむまがきの竹を出づる月かげ

由來感思在秋天

身にしめし秋の夕のながめより物おもふ我となりにけるかな

五首心詞よろしく候、無申限候歟、

綠草如今麋鹿苑

深草や秋の野らにもなりはてゝあるじがほなる小男鹿のこゑ

水底摸書鴈渡時

初鴈のつばさにかくるたまづさのかげさへ見ゆる山川のみづ

蔓草露深人定後

はらはねば更けゆくまゝにつゆぞおく草にやつるゝ庭の通路

蘆洲月色隨潮滿

みつ潮にすさきの蘆もみがくれて月よせかへるみしま江の浪

蘭蕙苑嵐擺紫後

むらさきに誰が染めおきし藤ばかまその色となく吹く嵐かな

四首又一字一句いやしからず宜しく候歟、

冬

毎朝聲少漢林風

もみぢ散る梢の時雨よわるなり昨日はあらしけふは木がらし

心すがたおもしろく候歟、

雪點林頭見有花

時雨までつれなき色と見しかども常磐木ながら花咲きにけり

面に雪とは見えず候ながら「時雨まで」と候に心こもりて實にこゝろよりがたく候、彼「からくれなゐに水くゝるとは」など同前に候歟、

雪妨鶴唳寒無露

おく露のむすべばしろき霜の上に夜ぶかき鶴の聲ぞさむけき

群源暮叩谷心寒

とぢやらぬ氷のしたになみさえて谷の小川ぞふゆごもりゆく

人無更少時須惜

惜めども老ばかりこそ積りけれあすはみそぢの數ならぬ身も

三首又こゝろ詞すがたいづれと難申候、落涙悲しく候、

戀

楊貴妃歸唐帝思

幻をうつゝばかりになぐさめてまださめやらぬ夢のかよひぢ

年々別思驚秋鴈

秋ごとにわすれぬ鴈のこゑ聞けばたちわかれにし人ぞ戀しき

寒閨獨臥無夫聟

ひとりのみ閨の狹筵うちはらひあかしわびぬる冬の夜な〳〵

身化早爲胡朽骨

あかざりし都をこふるなみだこそつひに越路の雪と消えしか

洲蘆夜雨他鄕淚

夢にだにまだみしまえのあしの葉に都こひしきそでの雨かな

五首心すがた高相かねていかに申すべしとも不覺候

不可說事に候歟、

雜

終宵床底見青天

かたしきや閨の板間のあれしより空もひとつに露ぞ置きける

蕭索林風吹笛處

笛の音のほの吹きすます秋風にとぼそさびしき里のひとむら

笛などはかゝる物にて候ひけるにや、

故山無主晩雲孤

人しれぬ山路のおくに住みなれて夕ぐれごとにかへるしら雲

晴後青山臨牖近

窓ちかきむかひの山に霧晴れてあらはれわたる檜原まきばら

三千世界眼前盡

見わたせばいく雲居ともしら雲のかぎりをかぎる夕ぐれの空

深洞聞風老檜悲

苔ふかきほらの秋かぜ吹きすぎてふるき檜原の音ぞかなしき

人如鳥路穿雲出

飛ぶ鳥の通ふばかりのしるべまで雲のかけ橋ふみみてしがな

暮鳥栖煙守廢籬

しとゞなく籬の竹のゆふけぶりいく世か經ぬる人すまずして

觸石春雲生枕上

いはがねの枕の夢もさめやらでよこぐもかすむ春のあけぼの

曉颺飛落峽煙深

あかつきの煙もふかき山の邊にをりしりがほのむさゝびの聲

付題ては無左右候へど猶物によりて爲輕片點候、

未遁春花夢裏名

散る花のあだなる春の夢の名も厭はずながらいとはしきかな

實に心詞をかしくよろしく候、

儻得難逢一乘文

優曇華の法の花にもあひにけり菩提のたねを植ゑてける身は

一生望西是長襟

世にふればいくそ思ひは思ひかは西をのぞむぞながき物思ひ

諫鼓苔深鳥不驚

音たえしいさめのつゞみ鳥なれて苔むすほどに年ぞへにける

不老門前日月遲

年へても老せぬかどをさしてけり空に月日のすまむかぎりは

詠三首和歌　貞應二年九月十三夜

閑中秋深

秋も今はふかきよもぎの下露もはらはでのみや霜となるらむ

遠山紅葉

もみぢする遠山鳥のおのづからたぐひありける袖のいろかな

曉月聞鹿

鹿の音にとだえがちにもなりにけり夜わたる月のゆめの浮橋

三首こゝろすがたよろしく候、

詠古寺九月盡　貞應二年

行く秋のなごりさびしきゆふべかな野寺の鐘にのこる松かぜ

末句實によろしく候、

詠寄竹祝　貞應三年正月五日

うぐひすの初春いはふくれ竹の千とせのいろをわが友にせむ

祝によりて尤よろしく候、

詠五首和歌　貞應三年正月廿三日

續拾遺集第二句「霞のつまや」第四句「まだわか草の」に作る、

野外霞

春のきるかすみにつまやこもるらむまだ若草にむさし野の原

この風情はいかにのこり候ひけるにか、

山間鶯

三吉野の山のうぐひす春かけて鳴けどもいまだ花ぞものうき

是は聊劣り候歟、

橋邊花

花見よとたれわたしけむあしびきの櫻にまがふ雲のかけはし

寄松戀

たけぐまのまつとはいはじ年ふともつれなき物と人もこそ知れ

寄水祝

いすゞ川たえせぬ水のみなかみも清きながれを照さゞらめや

詠五首和歌　貞應三年七月廿五日折句

女郎花

小倉山みちもまどはず鳴く鹿はへだつる霧にしをりをやせし

轡蟲

雲かゝる月のをちかた晴れやらでむかひの山に時雨ふるらし

駒迎

こぬ人をまつらがおきもむなしくて霞に涙はへだゝりにけり

孔子影

暮ると明くと忍ぶおもひや後の世のえだの劍の色に見ゆらむ

阿波國

秋風のはらひし宿は野となりてくずのうら葉ぞ庭にのこれる

詠五首和歌　同題

萩花

たつ嵐吹きぬるころは木の葉なきみ山にしもぞ月はすみける

小男鹿

波こほる今朝をしがもの床さえて玉藻の池にふゆは來にけり

蓋

小野の山宮木まばらに見えつるはきり〴〵炭をやけばなりけり

懸樋水

いかにせむ空しくすぐる駒のかげ日のみ積りて老となる身を

庚申

南さすのりのしるべにふだらくの岸へゆきつけかのえざる舟

年來隱題折句かゝるものにて候ひけると驚目候也無申限候歟、

詠月前思故郷　貞應三年八月十五夜

したひくる影はたもとにやつるともおもがはりすな故郷の月

詠冬景屬閑居　貞應二年十月廿七日　三歌

ふゆごもる里のあるじはこたへねど竹のあみ戸をたゝく木枯

詠歳暮多風雪　元仁元年十二月廿八日

風まぜにふるしら雪のつもりつゝ老てふ年をいそぐはかなさ

三首同じく宜しく候歟、

惣此中左右點片點難難分申上候、猶愚意之所及聊事を

も爲申上候、如此注進上候、地御製一切不見候之間申不及候歟、唯同事還無念候歟、今此左右點之上言、其體隨長短秀候歟、仍毎御製不註付候、只同事候歟之間如此候、以此旨可申上給候、

春五首　此以下以他本書加之

かぞふればなげきも老もつもりけりよそなる春を送り迎へて
むかし思ふ朽木の柳なにゆゑにみどりの髪をけづるなるらむ
山の端にやゝ入りぬべき春の日の心ながきもかぎりこそあれ
住みすてし花のみやこの家櫻たれかかざしと折りやつすらむ
咲きて散る花をもめでじこれぞこの嵐にいそぐあだし世の中

夏五首

もゝしきの庭のたちばな思ひ出でゝさらに昔をしのぶ袖かな
あやにくに鳴くや雲居の時鳥こゑなき風ぞとおもふ夜な〳〵
根をたえて生ふる五月の浮草のうき名ばかりぞ波にしづむる
あやめ草袖にかけても思ひきや長き根にのみ朽ちはてむとは
夏草のふかきおもひもあるものをおのればかりと飛ぶ螢かな

續拾遺集第一句「もゝしきや」下句「さらに昔の忍ばるるかな」に作る、

秋五首

初秋のゆふべしらする白露はきのふのそでのなみだなりけり
すゝき野の緑が末のはつ尾花なびくにつけてよるかたもなし
小萩原うつろひはてし秋のいろにあかず古枝の花をまつかな
鴈のくるそなたの空をながめてもおもひつきせぬみねの朝霧
そでぬるゝ秋をばあまたへしかども月にはあかぬ心なりけり

冬五首

柞原しぐると聞けば我が袖のかひなきいろぞまづまさりける

續拾遺集第五句「まづかはりけゐ」に作る、

霜がるゝ野邊の葛葉の心ちしてうらむるかひもなしや世の中

人めよりやがてあれにしわが宿の淺茅が霜ぞむすぼゝれゆく

續拾遺集第二句「やがてかれにし」に作る、

山陰にふるしら雪の消えやらでのこるうき身の末ぞかなしき

ゆくすゑを知らぬわが身のたぐひかな氷にむせぶ谷川のみづ

雜十首

つらしとて人をうらみむゆゑぞなき我心なる世をばいとはで

いとへとてなる世の中もいとはれてうき身に似たる我心かな

行く末のたのみは誰もありがほに待つは空しき月日なりけり

徒にこたへぬ空をあふぎつゝあはれあなうとすぐすなりけり

たれゆゑに塵にまじはる光ぞと問はゞや神のいかにこたへむ

續古今集詞書「述懐の御歌の中に」第五句「いかゞ答へむ」に作る、

うき身とも思へばいはじ逢ひがたき彌陀の誓を頼みてしかは

よく思へあまねき天の下なれど根なき草木のめぐみやはする

昔よりうき世の中と聞きしかど今日は我身の爲にぞありける

ゆきとまる里をわが世とおもへどもなほ戀しきは都なりけり

さだめなき程だに物を思ふかな木の葉の露の消えかへりつゝ

月前念佛

西へ行くこゝろに月の影晴れてすてぬ光のちかひをぞおもふ

月前述懐

なげくとて袖の露をばたれかとふおもへばうれし秋の夜の月

月前無常

とゞまらぬ浮世の數によそへつゝ今夜は月をまどろまで見む

草名十首

野邊に出でゝ誰家づとゝ折りつらむ春の蕨にまじるいたどり

夫木抄第二句「たれ家づとに」に作る、

極樂の池のかざりといつか見む今日はひらけぬ胸のはちす葉

夕立のなごりの露も消えやらでまだたわゝなる庭のとこなつ

八重葎しげきおもひにとぢはてし跡をばかれず秋は來にけり

年のうちにまた咲く花のなきまゝに菊の籬をなほぞつくろふ

別路に生ふる葛葉の露見ればきえぬたぐひもまた知られけり

あだにしく苔のむしろの露けきは都みぬめのなみだなりけり

神代よりくもらぬ空の日かげ草たえぬ末とはてらさゞりけり

つきくさの花にはすらじわが衣しげきなみだは露にまされる

いくしほもおのれが染むるいろぞかしなど紅のからあゐの花

木名十首

このごろはあるじも知らぬ梅の花春はみやこの木末のみかは

雲葉集第四句「たなびく方に」に作る、

咲きぬとも誰かは知らぬ春がすみたなびくかたは山なしの花

たちばなの袖に匂はぬ時だにも戀しきものはむかしなりけり

朝霧のなみまに見ゆる濱ひさぎさやかに秋のいろはわかれず

深山邊やまゆみよりこき色ぞなき紅葉は秋のならひなれども

新千載集第一句「しぐれふる」第四句「とにもかくにも」に作る、

しぐれつるこのて柏の二おもてとてもかくても濡るゝ袖かな

埋るゝ木の葉が下のみなし栗かくて朽ちなむ身をば惜しまず

しきみ摘む心のおくの山なくばあさきなげきを何かこらまし

杉のかどさゝむとまでは思はねど訪ふ人なしに苔とぢてけり

ひかりをば玉串の葉にやはらげて神の國ともさだめてしがな

蟲名十首

山ざとの花のそのふにまふ蝶のいろ〳〵まがふ春のゆふぐれ

むらさめの雲夜間イのほたる數見えて風吹きすさぶ庭のなつぐさ

わがやどの庭の夏草つゆかけてなみださきだつまつむしの聲

ひぐらしの鳴く夕ぐれの山風に色をもまたで散る木の葉かな

冬枯の蓬がもとのきり〴〵すいけるばかりはげにぞかひなき

神垣は祈るいのりはおそけれどゐもりのしるし猶や見ゆらむ

蜻蛉の小野の草葉のあれしよりあるかなきかと問ふ人もなし

家をすてぬ心は同じかたつぶり立舞ふべくも見えぬ世なれど

世の中をおもへば誰もひをむしの今日のいのちの夕ぐれの空

拾遺風體集第四句「吹く風すさむ」に作る、

去木抄第五句「あらぬ世なれど」に作る、

軒ちかきまがきの竹の末葉よりしのぶにかよふさゝがにの絲

鳥名十首

春もいまだあさるきゞすの跡見えずむら〳〵殘る野邊の白雪

夏の夜のさてもあくるにならひてや我門たゝく水鷄なるらむ

別れこし都のかたのことづてもなほ待たるゝは秋のかりがね

蘆の葉につなぐうきすも氷りつゝすみあらしたる冬のにほ鳥

み山べの嵐にうつるこがらめは時雨にのこる木の葉とぞ見る

いつもきくおほおそ鳥の聲までも寢覺かなしきありあけの月

足引の山深くすむみゝづくは世のうきことを聞かじとや思ふ

籠のうちにまだすみなれぬひゑ鳥は心なくても世をすぐす哉

はしたかのとかへる山にすみながら淺き心はならはざりけり

夫木抄第五句「木の葉なりけり」に作る、

夫木抄第四句「うき世の事を」に作る、

夫木抄第四句「心ならでも」に作る、

山鳥のをろの鏡にあらねどもうきかげ見ては音ぞなかれける

續拾遺集詞書「戀の心を」に作る、

獸名十首

この比のしづが田かへすからすきのうしと思ふも力なの世や

谷深みふすゐのかるもかきたえてなれし都ぞうとくなりゆく

萬代集第一句「露ふかき」に作る、

霧ふかき嶺ゆく鹿の友をなみまよひてのみぞ音はなかれける

狐だにかげをうかゞふ山川のこほりのうへを蹈みてのみ行く

夫木抄第五句「道もあるらむ」に作る、

世をしのぶ心のうちの穴ねずみやすく出づべき道もあるらし

つきもよに梢もとむるむさゝびの聲きく時ぞゆめはたえぬる

あらぐまのすむ奥山に入りしよりおそろしき世を忍ぶ苦しさ

こゝろをば北の翁にならへどもまた立ちかへる駒だにもなし

夫木抄第二句「命をかふる」に作る、

月かげに命をかへし猿よりもしづみはてぬるわが身なりけり

人心てがひの虎にあらねどもなれしゝもなどうとくなるらむ

夫木抄第四句「なれしもなどか」に作る、

月三首

なゝとせの秋の今宵をいたづらにひとりし見れば月も恨めし

わが袖の物なりながら秋の月くもるはえこそとゞめざりけれ

なほざりに過ぎし心のむくいにやかゝる旅寝の月を見るらむ

名所春

吉野山まだ冬ながらかすめるやふもとの春のはじめなるらむ

風雅集第二句「かぜも緣に」に作る、

時しらぬたぐひも今はいかゞせむ朽木の柳にかすみたなびく

續古今集第一第二句「霞にも富士の煙ば」に作る、

舟つなぐかげもみどりになりにけりむつだのよどの玉のを柳

霞には富士の煙もまがひけり似たるものなきわがおもひかな

三笠山ぬれぬ草木のみどりさへよそに染めなすはるさめの露

難波女の蘆火のとがもなかりけりおのれとくもる春の夜の月
菅原や伏見のあら田うちかへし民のしわざになれるこのごろ
常磐山いかなる春のけしきぞと花よりほかもなほぞゆかしき
山姫の花をりかくるかつらぎのかすみのころも春ぞかさなる
宮木もりなしとや風もさそふらむさけばかつ散る志賀の花園

同夏

たちかふる衣の關のせきもりはきのふの春をえやはとゞむる
浪のゆふかくるころとや卯の花のかげにかくれぬ玉川のさと
かしは木の杜の下葉を折りしきてやかつみ神をまつる比かな
大原やをしほのやまのほとゝぎす昔にあらぬ音をや鳴くらむ
しるしある三輪の梢も見えわかずいづれも杉の夏のみどりに
やつれゆくすがたの池の菖蒲草うきねばかりを袖にかけつゝ
吹く風にむかしをのみやしのぶらむくにの都に殘るたちばな
あけはてゝしばしも見ばや玉くしげふたみの浦の夏の夜の月
夏のこる玉江の鴈にとひて見むかくふるさとは忍ぶものかと
きぶね川あかつきやみもなかりけり月に螢のかげをかへつゝ

夫木抄第五句「にほふたちばな」に作る、

同秋

春日野の荻のやけはらいつのまにうは葉に秋の風かよふらむ
伊勢の海ふかきちぎりのまゝならば今夜かげ見む星あひの濱
露ながら秋まちえたるはぎはらのふる枝の萩に風なふれそも
花すゝき下にかよひし小男鹿もこゑほにいだすいなみ野の原
久方のかつらの里もあるものをなどやみやこの月はこひしき

第二第三句夫木抄「契も深き秋ならば」雲葉集「深き契の秋ならば」に作る、
夫木抄第四句「ふる枝の花に」に作る、

ちはやぶる神もや秋をちぎるらむ木の間さびしき月よみの杜
あふさかの關のわらやは跡もなし秋のしらべを松にのこして
津の國のなにはかくれぬ弓はりのはつかの山にのこる月かげ
深草や誰ふるさとゝ知らねどもむかし忘れずころもうつなり
鐘の音によもぎがつゆぞおきまよふ豐浦の寺の秋のゆふぐれ

續古今集詞書「名所擣衣といふ事をよませ給ひける」に作る、夫木抄第三句「おきまさる」第五句「秋の夜の月」に作る、

同冬

いろどりし秋の木の葉は散りはてゝ殘る繪島の松のひとふで
かくばかりしぐるゝいろやなかるらむ都の人のころもでの杜
霜さむきまがきの島の冬がれになみの花もやいろかはるらむ
木がらしに下葉のこらず散りはてゝげにもる山の冬の月かげ
見わたせばまじるすゝきも霜がれて綠すくなきゐなのさゝ原
宮城野や枯葉だになき萩が枝にをれぬばかりもふれるしら雪
御狩せし嵯峨野はさとにすみなしておのが家々冬ごもりせり
須磨の涙あかしの月も夜寒にておのがうら〳〵千鳥鳴くなり
冬さむみゆるぎの森にゐる鷺のそれとも見えぬ雪のゆふぐれ
老といひてかさなる春も飛鳥川はやき瀨にのみ行く月日かな

玉葉集第五句「つもる白雪」に作る、

同戀

たのめこし人の心はかよふやと問ひてもみばやうやむやの關
名取川うき名にぬるゝ戀ごろも逢ふ瀨待つまに朽ちやはてなむ
あまの原あけてくやしきちぎりより思ひしらるゝ水の江の筥
市人の染めし飾磨のかちよりもふかきちぎりの色は見せてき
はふ葛のうらみはすゑもとほらねばこゝろにまよふ足柄の山

いくよとか袖のしがらみせきもえむ契りし人はおとなしの瀧

續拾遺集第三句「せきもみむ」に作る、

我戀はかた野の萩におく露のうつろふまゝに手にもたまらず

なゝひろの石よりもなほつれなきはひかれぬ人の心なりけり

行きあはむほどをば知らず住吉の松に絶間の千木のかたそぎ

新拾遺集第四句「松の絶間の」に作る、

うつの山すぎにし夢の面かげに見はてぬ夢はうつゝなりけり

花光契萬年

梅の花にほひはつきじ萬代のはるのかざしと植ゑおきしかば

以長夜月置末句二首

ながむれどしばしなぐさむかげもなしたが僞のながき夜の月

このごろの涙は秋のゆゑならずくもりなはてそながき夜の月

戀二十五首

寄風

難波女のあし火の煙たきまさりなびかぬかたへなびくしほ風

寄月

このくれと待たましものを秋の月ちぎりしまゝの契なりせば

寄雲

たゆたひに思ふこゝろもさほ山の色には見えずよそのしら雲

寄露

宵のまは出でゝ拂はむと思ひしにさきだつ袖の露ぞあやしき

寄雪

年ふれどあとなき人のちぎりゆゑつもりはてぬる庭のしら雪

寄山

深くのみ思ひ入るかなこしかたをまよふ山路と何なげくらむ

寄河

飛鳥川あすもありとやたのみけむ今日は逢ふ瀬にかふる命を

寄野

すゝき野の尾花がもとにしをれても思の露ぞおきどころなき

寄浦

朽ちはつるそでしの浦の涙ならばうきに流るゝ名をも殘すな

寄關

あしがきの夜半のまもりや心あらむしのびをゆるす川口の關

寄松

年へてもまつとは誰かうゑおきしつれなき色に人ならひけり

寄櫻

さだめなき人のこゝろの花櫻さくといふまにうつろひにけり

寄竹

吳竹のよゝのちぎりも知られけりうきふし繁き戀のむくいに

寄萩

小男鹿のたち野の小萩つゆよけて消えなむ後を誰にかこたむ

寄葛

眞葛原うらむる色をしらせばや秋にはあへぬ身ともこそなれ

寄鶯

音にたつる心のともゝ忘られぬなげきにうつる春のうぐひす

寄螢

きぬ〳〵のあかつきやみに飛ぶ螢まよふ心のしるべをしへよ

寄鴈

初鴈のわすれぬ秋のこゑきけばながき思ひのゆくへ問ふらむ

寄蓋

ひとりぬる枕としるやきり〳〵す長き思ひのゆくへとふらむ

寄鴛

我戀は氷にすだくをしどりのむすぼゝれ行く音をのみぞなく

寄衣

待ちくらし恨みあかしておく露のしろあさ衣ぬれ〳〵ぞきる

寄枕

しきたへの枕の上にむす苔もひとりねよりや生ひはじめけむ

寄鏡

ますかゞみ戀しき人は見えなくに我が面影のなにうつるらむ

寄燈

窓ふかき秋のともし火きえやらでもゆるは胸の思ひなりけり

寄席

ぬるがうちに見し面影も忘られてうつゝにあかす夜半の狹筵

韻字六首

軒

世にふればかやが軒端の月も見つ知らずや人のゆくすゑの空

繁

いくたびか秋の袂の朽ちぬらむしげきなげきの露のしたにて

猿

山ふかく住みけるほども知られけり月夜の猿の窓ちかきこゑ

魂

あくがるゝ我がたましひのゆくへをも千里の外の月や知るらむ

門

西へとやみのりのかどを敎ふらむさきだちてゆく秋の夜の月

痕

通ふべきあとありとだに忘れなむとはれぬ庭を苔にまかせて

朝鶯

うぐひすの鳴けどもいまだ明けやらで横雲ゆるき春の大ぞら

夕霞

夕がすみたなびき渡す山の端にみどりの松のかげぞすくなき

春戀

恨みこし人のこゝろもとけやらず袖のこほりに春はきぬれど

〔以上土御門院御集〕

春二十首　定家卿點九十二首、家隆卿點九十八首

立春

あさあけのかすみの衣ほしそめて春たちなるゝあまのかぐ山

本歌の心を見るべく姿詞及びがたし、眞實殊勝目もくれ候、

子日

白雪の消えあへぬ野邊の小松原引く手に春のいろは見えけり

續古今集詞書「雪中子日といへる心をよませ給ひける」に作る、

義理相叶ひ詞花珍重、

霞

白浪のあとこそ見えねあまの原かすみのうらにかへるつり舟

下句美麗、

新後拾遺集第五句「かへる鴈がね」に作る、

鶯

雪のうちに春はありとも告げなくにまづ知るものは鶯のこゑ

あなうつくしの姿詞や、こは誰にか、

新三十六人撰第二句「春はきぬとも」に作る、

若菜

誰がための若菜ならねどわがしめし野澤の水に袖はぬれつゝ

心言葉みな相叶へり、あな上手の所爲かな、

殘雪

うもれ木の春の色とやのこるらむ朝日がくれの谷のしらゆき

多く埋木を詠ずるになどこの心は候はざりけるぞ、

梅

梅が香もたがたもとをかちぎるらむおなじ軒端の春の夕かぜ

一事無難、但普通の當世歌、

柳

うぐひすのよるといふなる岩はしのかつらぎ山になびく青柳

夫木抄第二句「よるとなくなる」に作る、

早蕨

あさみどり苔のうへなる早蕨のもゆる春日を野邊にくらしつ

櫻

見渡せば松もまばらになりにけり遠山ざくら咲きにけらしも

如法秀逸、

春雨

うぐひすのこづたふ木々も春雨のふるす戀しき聲そものうき

ありがたく候、

春駒

難波江やまばらに見えし蘆の葉も芽ぐめばやがて駒ぞすさむる

此駒こそ神妙に覺え候へ、

歸鴈

御吉野の花にわかるゝ鴈がねもいかなる方によると鳴くらむ

「いかなる方によるとなくらむ」是賞翫に候、

呼子鳥

新續古今集第五句「聞く人ぞなき」に作る、

まきもくの檜原の山のよぶこどり花のよすがに聞く人もなし

以ての外こゝろにまかせ候ものかな、これなど大方おぼえず候、

苗代

夫木抄第二句「山のしづくに」に作る、

氷とけし山田のしづくせきかけてなはしろ水にさゞ波ぞたつ

堇菜

堇つむ春の野原のゆかりあればうすむらさきに袖やぬれなむ

杜若

春風の池ふきはらふ波の上におのれうつろふかきつばたかな

これ程のものとこそ知り候はざりつれ、

藤

この比は田子の藤波なみかけてゆくてにかざす袖やぬれなむ

欵冬

波かくる井手のやまぶき咲きしよりをられぬ水に鳴く蛙かな（蛙鳴くなリイ）

三月盡

吉野川かへらぬ春もけふばかり花のしがらみかけてだにせけ

夏十五首

更衣

きのふまで馴れしたもとの花の香にかへまくをしき夏衣かな

此句ぞいつも愚意にうけ候はぬ、

卯花

月日へてうつればかはるながめ哉さくらは散りし庭の卯の花

葵

あふひぐさかけてぞたのむ神山の峯の朝日のくもりなければ

郭公

ほとゝぎす鳴くや卯月のしのぶ草しのび〳〵のふるさとの聲

菖蒲

夏の池の汀のあやめうちなびき吹く風ごとにさゞなみぞ立つ

さゞなみ候ひつれば吹く當然、

早苗

さなへ取るふしみの里に雨すぎてむかひの山に雲ぞかゝれる

此むかひの山はいかに候事ぞ、これなどよみ候ひぬべき人こそおぼえ候はね、あなうつくしや、

新三十六人撰に第四句「うちたれ髪の」に作り順德天皇の御製として載す、

照射

ともしする端山の末に立つ鹿の鳴かぬころだに露ぞこぼるゝ

五月雨

飛鳥川淵瀬もえやはわぎもこがうちみだれ髪の五月雨のころ

盧橘

雨おもき軒のたちばな露散りてむかしをしたふ空のうきぐも

螢

夏の夜は我が住む方のいさり火のそれともわかず飛ぶ螢かな

蚊遣火

夏くれば(なゝ)ふせやにくゆる蚊遣火の煙もしろし明けぬこの夜は

此句いづれも〳〵、

第二句新續古今集「とけむ期もなき」雲葉集「とけむともなき」に作る、

蓮

風吹けば波に露ちるはす(ちすゝ)の葉にかず〳〵もろきいざよひの月

氷室

くるとあくと解けむことなき氷室山いつかながれし谷川の水

泉

秋やとき月やおそきとやすらへ(はむ)ば岩もる水にゆめもむすばず(でゝ)

夫木抄第三句「告げずとも」に作る、

六月祓

行くほたる秋かぜ吹くと告げねど(ぬらむゝ)もみそぎすゞしき川社かな

秋二十首

立秋

小笹ふく嵐やかはるあしびきのみやまもさやに秋は來にけり

七夕

秋もなほ天の河原に立つ波のよるぞみじかきほしあひのそら

殊勝々々、

萩

萩が花うつろふ庭のあきかぜに下葉もまたでつゆは散りつゝ

續拾遺集第四句「下葉をまたて」に作る、

女郎花

女郎花うゑしまがきの秋の色はなほしろたへの露ぞかはらぬ

薄

すゝき散る秋の野風のいかならむよる鳴く蟲の聲のさびしき

苅萱

山かげや暮れぬとおもへば苅萱の下おく露のまだきいろなし

續古今集第一第二句「夕されば」に作る、

蘭

露のぬきあだに織るてふふぢばかま秋風またで誰にかさまし

萩

夕ぐれはまがきの萩に吹く風の目に見ぬ秋をしるなみだかな

初鴈

峰こえて今ぞ鳴くなるはつかりの初瀬の山のあきぎりのそら

玉葉集第一句「深山路に」第四句「聲する方に」雲葉集下句「聲きく方に月ぞ殘れる」に作る、

鹿

深山田にあかつきかけて鳴く鹿の聲すむかたに月ぞかたぶく

露

山がつのあさの衣手まどほにてあらしやうすき露ぞおくなる

霧

ながむれば峰のあさぎりたつ鴈のかずさへ見えぬ山の端の色

槿

今朝のまの色もはかなしあさがほの花におくるゝ秋のしら露

駒迎

逢坂や行く旅人のあづさゆみ今日やひくらむもちづきのこま

月

秋の夜もやゝ更けにけり山鳥のをろの初尾にかゝるつきかげ

擣衣

里とほききぬたの音も夜寒にて我がころもとや鴈も鳴くらむ

蟲

きりぐす過ぎにし秋やしのぶらむふるき枕の下に鳴くなり

菊

誰ゆゑにうつろはむとか初霜のたわゝにおけるしらぎくの花

紅葉

奥山のちしほの紅葉いろぞこきみやこの時雨いかに染むらむ

九月盡

けふもまた誰が夕ぐれのわかれぢと秋の名殘の牡鹿鳴くらむ

冬十五首

初冬

もみぢ葉の降りかくしてし我宿に道もまどはず冬は來にけり

時雨

吳竹のみどりの色はかはらねど時雨ふりにしまがきともなし

雲葉集第二句「みどりは秋も」に作る、

霰

おしなべてしぐれしまではつれなくて霰に落つる柏木のもり

これなどこそ不思議に候へ、つねに人の見つけ候ものかは、

霜

立田山木の葉もあだに散りはてゝゆふつけ鳥に霜はおくなり

雪

よしの山けふ降る雪やうづむらむ入りにし人の路だにもなし

寒蘆

難波江や住みうき里のあしの葉にいとゞ霜おく冬のあけぼの

千鳥

夕ぐれは浦もさだめず鳴く千鳥いかなる海士の袖ぬらすらむ

氷

山の井のむすびし水やむすぶらむこほれる月の影もにごらず

貫之にまさる、

水鳥

をし鴨の羽がひをこゆるしら波によるは玉藻の床もさだめず

網代

網代木によどむ木の葉のいろ見れば都のたつみ秋ぞのこれる

これなどは普通にてよき歌とて候、

神樂

さかきとる八十氏人の袖のうへに神代をかけてのこる月かげ

鷹狩

ならしばや枯葉のうへに雪ちりてとだちの原にかへるかり人

新後撰集第二句「枯葉の末に」に作る、

炭竈

よそにてもさびしとは知れ大原やけぶりをたつる炭がまの里

新續古今集第四句「煙を絶えぬ」に作る、

此句こそおもしろくあまりなるまで覺え候へ、

爐火

うばたまの夢もさむけきあかつきは殘るともなき埋火のもと

歳暮

今日と暮れ今年と暮れぬ明日よりやきのふとおもひし春の曙

戀十首

初戀

思ひそむる森の木の葉の初時雨しぐるとだにも人に知らせむ

此時雨たれにて候ぞ、

忍戀

とへかしな眞木たつ山の夕しぐれ色こそ見えね深きこゝろを

不逢戀

あはでふるなみだの末やまさるらむいもせの山の中の瀧つ瀨

初逢戀

新枕ちぎりをかはす草の葉にたれかならひのつゆやおくらむ

一本題「後朝」に作る、

後朝戀

わすれめやおもかげさそふありあけの袖にわかるゝ横雲の空

遇不逢戀

月草の花のこゝろやうつるらむ昨日にも似ぬそでのいろかな

旅戀

ものおもへば田蓑の島の海士衣ぬるゝならひの波やこゆらむ

思

夕されば(ぞイ)むぐらの宿のしら露もおもひあれば(ぞイ)や袖におくらむ

片思

伊勢島やみるめにまじるうつせ貝あはでしをるゝ袖(ぞイ)の悲しき

恨

なみだちる袖に玉まく葛の葉(に)の秋かぜ吹く(かばイ)と問はゞこたへよ

雜二十首

曉

かたしきの涙の數にくらべば(てもイ)やあかつきしげき鳴のはねがき

松

幾世ともいはねの小松秋を經てあらしも露もいろはかはらず

竹

くれ竹のよわたる月のかげぞもる葉わけの風や雲はらふらむ

石床留洞嵐空拂、玉案拋林鳥獨啼、

苔

むかし誰が住みけむ跡のすてごろもいはほの中に苔ぞ殘れる

萬代集第一句「むかしたれ」に作る、

煙霞無跡昔誰栖、あなめでた、文時再誕景、最殊勝々々、

鶴

葦田鶴の翅に霜やさむからし小夜もふけ(ながねイ)ひのうらみてぞ鳴く

山

岩が根のこりしく山の椎しばもいろこそ見えね秋かぜぞ吹く

河

駒とめてひのくま河にやすらへばみやこ戀しき秋かぜぞ吹く

野

武藏野や山の端もなき月を見てこよひは草のまくらむすばむ

關

浦風に須磨の關戸も明けぬらむあかつき待たで千鳥鳴くなり

橋

をばたゞの宮のふるみちいかならむ絶えにしのちは夢の浮橋

海路

新後撰集第三第四句「朝霧にはや遠ざかる」に作る、

かさゆひの島立ちかくす夕ぎりにいやとほざかる棚なし小舟

旅

一本題「別」に作る、第五句續千載集「袖ぬらしけり」新後拾遺集「袖はぬれけり」に作る、

かげろふのおのれしげれる草の葉もかりにやむすぶ秋の旅人

離別

朝霧に淀のわたりを行く舟の知らぬわかれもかなしかりけり

田家

稲むしろあれしなごりのいほなれば月を伏見のかたしきの袖

山家

夕ぐれは我がすむ山の秋かぜもたれとはなくて松に吹くこゑ

懷舊

増鏡一本第四句「なれこし月も」に作る、

秋の色を送りむかへて雲のうへに馴れにし月も物わすれすな

夢

うば玉のさめても夢のあだなればいやはかなゝる袖の露かな

無常

春の花秋のもみぢのなさけだにうき世にとまる色ぞまれなる

述懐

しづかなる心のうちもひさかたの空にくまなき月や知るらむ

祝

あまつそら雲居をさしてゆくつるのゆくすゑ遠き聲ぞ聞ゆる

〔以上土御門院御百首〕

千五百番歌合のうた

いづれぞと草のゆかりもとひわびぬ霜がれはつる武藏野の原

大納言通方藏人頭に侍りけるとき内より女房とも

なひて月あかき夜大炊殿の花見にまかりけるをき

こしめしてつかはされける

たづぬらむ梢にうつるこゝろかなかはらぬ花を月に見れども

初戀の心を

ひまとめていかで知らせむ玉すだれけふよりかゝる心ありとも

〔以上續拾遺集〕

遠き所より日吉の社にたてまつられける七首の御

うたの中に

跡たれしちかひは山のかひあらば歸るしをりの道はたがはじ

〔新續古今集〕

承久三年土佐國より阿波國につかせ給ひて

浦々によするさなみに言とはむ隱岐の事こそ聞かまほしけれ

〔承久兵亂記〕

歴代御製集卷五 終

歴代御製集卷六

順德天皇 上

建暦元年三月五十首

立春

きのふまでむすびし池の水のおもに氷ながらの春かぜぞ吹く

子日

子の日する小松が原にしら雪の消えあへぬまに春はきにけり

山霞

しら雲のかゝるか峰に夕づく日かすみたつ田の山もおぼろに

谷鶯

谷川のうち出づるなみの浪間よりまだ春なれぬうぐひすの聲

籬梅

このごろはまがきの梅に風さえて春やむかしの月ぞかたぶく

若菜

若菜つむ袖もしをれて春ぞとも野邊にしらせよ雪のむらぎえ

春雨

はるさめはすぎぬる跡の夢の中に窓うちすさぶ軒のたまみづ

岸柳

あをやぎの岸のしら波よる春のみどりはふかしあけぼのゝ空

庭櫻

春ごとのわすれがたみの庭の花こずゑも雪のあけぼのゝそら

暮春

ゆふづく日名殘もなくて行く春のひかりも今はいりあひの鐘

郭公

夏草のしげれる比のほとゝぎすなか〳〵過ぐる聲なもらしそ

卯花

夏木立やすらふほどのゆふぐれに卯の花垣をこゆるしらなみ

菖蒲

五月雨のしづくはいまだ軒にしてあやめが末に露ぞかさなる

瞿麥

ゆふだちの名殘はしるしとこなつの花に露そふくれがたの空

鵜川

かゞり火の河波しろくなるまゝにくだす鵜舟もよこぐもの空

立秋

今朝はまだこずゑも夏のいろなから草葉の露に秋かぜぞ吹く

曉鹿

秋といへばありあけの月になく鹿のこゑ吹きおくる峯の松風

夕霧

春がすみかすみし山のふもとにもかはらず見ゆる秋の夕ぎり

草露

ゆふされば野はらの秋の風すぎてをぎの上葉に露ぞいろづく

野萩

宮城野のいろある袖や小萩原つゆこそむすべあきかぜぞ吹く

苅萱

秋ふかき淺茅が原をたづぬれば露にみだるゝ野邊のかるかや

雲鴈

はつかりの雲居のよその一こゑはきく人さへに袖ぞしをるゝ

夜蟲

蟲の音に夜ぶかき鐘の音そへてむなしき夢ぞかよふあきかぜ

羇月

草まくらこよひは野邊の月を見むおなじみやこの秋の夜の空

暮秋

秋ぞ今は暮れゆくほどのたそがれに今日をかぎりの入相の鐘

時雨

神無月しぐれは秋もみむろ山かはらぬそらにふゆは來にけり

落葉

立田山さこそ紅葉はちりつめど木の葉な吹きそ冬のやまかぜ

庭菊

庭のおもの菊のしらつゆ今はとてうつろふころの夕ぐれの空

橋霜

こほりとぢしたゆく水もたえ〳〵に霜こそむすべ宇治の橋姫

朝雪

冬ふかくなりゆくほどのしるべにはけさふる雪に山風ぞ吹く

初戀

きのふまでよそにおもひし袖の上の涙の色も今日ぞかなしき

忍戀

つきもせず思ふものからしのぶ山たえなむ後の峯のしらくも

尋戀

たづねてもなか〳〵つらし袖のつゆ秋なる色を人にまかせて

契戀

頼めおきし契ばかりやうきことのわすれがたみの思出にせむ

待戀

秋の夜はながきかたみとおもひしにまつには出でぬ有明の月

逢戀

よそにても月日をいかにすごしけむあふにもつらき人の心を

恨戀

たのめてもかひやなからむ眞葛原うらむるつゆの秋の夕ぐれ

旅戀

いつよりもねざめさびしき草枕かりに見し夜の人ぞこひしき

見戀

なか〳〵によそには人を思ふともかつみる袖の色ぞかなしき

久戀

すがのねの契もいまは朽ちはてしむかしがたりの山の端の月

關路

ありあけの月も雲居にかげとめぬかすめる末やしらかはの關

旅宿

ほの〴〵とかすむ山路の旅人の分けゆくすゑは春のまつかぜ

野徑

野邊はまだ霧のまよひに分けかねぬいづれかをぎのつゆの曙

眺望

はる〴〵とながむる人もたえ〴〵に霞みて見ゆる三吉野の花

海路

ながむれば春のものとやあかしがた霞のまよりありあけの月

難波江やあしのわか葉に雪消えてこほらぬ涙はたゞ春のかぜ

山家

山ふかみさこそあるじはなしとても花ちる比は人のとへかし

閑居

人とはぬやどにも秋のかなしきはむなしき夢におくる鹿の音

擣衣

秋の夜の月にさびしきころもうつきぬたの聲に夢ぞみじかき

祝言

君がへむよろづ代までもしら雲のかさなる山の峯のまつかぜ

同比内々歌合

春

こほりゐし岩間の水のとけやらで雪ふるさとに春は來にけり

みよし野や跡なき雲をふきかねて花にあらそふ春のやまかぜ

夏

このごろは淀のわたりのあやめ草すゑこす浪にかる人もなし

わするなよまたこむ年もほとゝぎす軒のあやめの五月雨の空

秋

ひさかたの空ゆく雲のたえまより月のみやこに秋かぜぞ吹く

みやまより松のあらしやかよふらむ眞葛が原に露ぞこぼるゝ

冬

つゆおきし草葉の霜や消えかへり庭にしぐれのふるさとの空

ながめつゝなにを何とか思はましはゝその森の雪のゆふぐれ

戀

なげきつゝまたじと思へど袖の上に恨みがほなる秋風ぞ吹く

いつまでか人をも身をも恨むべきたへぬ浮世の忘れがたみに

同比當座

秋海

順德天皇

伊勢島やしほかぜさむくなるまゝに浪にやどかる秋の夜の月

冬池

いけみづはこほりにけりと霜むすぶ蘆の枯葉に風よわるらむ

同七月當座

月照草花

山の端にありあけの月は出でにけり小萩が原の露ぞうつろふ

夜蟲

なか〳〵に霜夜のとこのきり〴〵すなきてな告げそ秋の哀を

又當座

秋

見わたせばまゝの萩原露しろしながめのすゑよ月や出でぬる

寄松戀

頼めずばつらきならひと思はましなか〳〵なりや松に吹く風

同八月十日當座

深夜月

里人のおのがよわたるこゑもせず更けゆく月に道はあれども

述懐

われ〳〵はたれかは身をば思はねば世のことわりの人も少し

同二年二月廿六日内々歌合

山中花夕

みよし野や花に跡とふゆふぐれの空はにほはぬ春のやまかぜ

かつらぎやたかまのさくら春ふけて夕ゐる雲の跡ぞさびしき

野外秋望

袖におくあさけの露のほしもあへず霧にわけゆく秋のたび人

あさぢふや野邊のあはれも白露の深きは秋のならひなりけり

同三月女房侍臣大炊殿へむかひて花月をもてあそぶ

と聞きて遣之

住みなれしおなじ花とは思へども今宵の月にいかゞうつろふ

いかばかり雪しく庭のうつるらむ月に出でぬる雲のうへびと

此大炊殿去年春内裏也、頭中將道方朝臣以下無指歌仙、

仍良久返事持來、依見苦不能註、

三月庚申夜三首は替人當座

霞隔殘花

花はみなちり行くかたの朝がすみたなびく山に風や吹くらむ

山人のかすみをわくる袖の上に馴れしかたみの花の香ぞする

暮春曉月

春の行く有明の月の山の井にあかでやかげをうつしとゞめむ

今宵にや春のあはれをかぎるらむかすみに殘るあけがたの月

深夜待戀

ふかき夜のあはれは同じまつら山もろこし船の風のたよりを

待つ人の夜半のあはれはおともせで更けゆく鐘に山風ぞ吹く

同比行幸七條殿夜當座

雨中落花

散る花のかたみとのこる雲だにも色こそ見えね雨のゆふぐれ

宴遊待曉

もろ人の春のあそびのなごりより明けなば折らむ宿の梅が枝

對泉戀夏

春なれば結ばぬ水のこゝろにもおのがさかりの夏や待つらむ

同比當座

山花

花の色もうつりにけりとしらくもの道行きぶりにかをる山風

五月十一日詩歌合詠無風聞始于今度

山居春曉

松の戸になれぬあらしをさきだてゝ花より明くる春の山の端

人とはぬまきの外山や霞むらむおなじみどりに明くる空かな

水郷秋夕

よし野川さくらながれし涙のうへも霧にあとなき秋の夕ぐれ

袖よまた□いく秋にしをれきぬゆふべこと問へ宇治の橋姫

羇中眺望

行きくれぬなほまたこえむしるべせよ里とふ山に出づる月影

わすれなむ思ひなれにしふるさとも月は見し夜のさやの中山

同廿三日歌合

羇旅花

櫻色の雲わけなれしたびごろもうつろふそでに匂ふはるかぜ

晩郭公

ほとゝぎす夕の雲に聲すなりまつとしもなきさみだれのそら

田家月

かり庵の月をかたしく袖のうへに稻葉がすゑの露ぞみだるゝ

深山雪

みやこ人けさのしをりも跡たえぬ槇の葉しろき雪のやまみち

後朝戀

かへるさの袖にもなほやむすぶらむきのふのくれの床の白露

同比當座

松風如秋

山おろしの松ふきしをるゆふぐれも秋かは袖に露こぼれつゝ

月前水鷄

ながめきて月も幾夜のまきの戸をたゝく水鷄や寢覺とふらむ

朝瞿麥

とこなつのまがきうつろふ朝じめり夕立またぬ露ぞこぼるゝ

同比當座

松間時鳥

ほとゝぎす雲をたよりにすぎぬめり松の嵐にこゑをまかせて

水邊夏月

夏山の木のまにかげや更けぬらむ浪よりしらむあけがたの月

同比當座

水上月

ますらをがたかせさしこす跡見えてゐぜきによどむ波の月影

夏山風

おくれても今日のさくらの木のまより春ありがほの山の下風

同比當座

海上夏月

なにはがた涙に鹽くむあまびとの袖にすゞしきこのごろの月

故郷落葉

秋ふかくならの落葉に霜さえて名におふ里はふりまさりつゝ

又當座

戀

一本第一句「あけくれぬ」に作る、

あけぬくれぬひとりぞふじの煙をも思ひありとは誰に歎かむ

浮沈みかくてみるめのかひもなみ人ををじまの怨めしの身や

春

このごろは秋みし色のあともあらじなれしかたみや春の松風

同六月於大内

禁庭竹

九重や名にも涼しきかはたけの風にしらるゝ代々のゆくすゑ

同比詩歌合當座

海上月

すゑにみし雲路もしらぬ浦わより月に漕ぎ出づる海士の釣舟

白雲を袖にかけこしあらしだにきのふともなき涙のうへの月

山寺花

花の色を入相の鐘にたづねきてむかしもしるき志賀の山かぜ

はつせ山花はあらしにあとたえぬよそなる松を峯にのこして

七月會當座

契變改戀

きのふ見しゆふべの雲は跡もなしちぎりし山は月もいづれど

恨後悔戀

天のとや明けて別れしあかつきのなごりの空をなに恨みけむ

同初秋比無溝

晩風在秋

よろづ代のはじめの秋をしらすなり夕かぜすぐる庭のくれ竹

野花纔開

西よりぞいろかはりゆく小萩原野はらの露もまづや染むらむ

橋邊秋月

かけてのみ思ひぞわたるあづまぢや月すむころの佐野の舟橋

尋不逢戀

たづねてもふかきよもぎの白露をむなしく分けぬ夕暮ぞなき

不忘絶戀

しら雲はたえにし後の山の端になほおもかげの月ぞすみける

同八月三日夜

湖上月

志賀の浦や月はむかしの色ながら涙にふりゆく秋のまつかぜ

曉山鹿

霧の間はなほ明けやらぬみ山よりたもとにおくる小男鹿の聲

同月行幸七條殿當座

月契久秋

いくとせとかぎらぬ空にめぐりこむ月にぞ契るゆくすゑの秋

草花滿庭

雲居ゆく鴈のなみだもふるさとの庭にうつろふ萩のうはつゆ

秋風增戀

こぬ人をまつとつげこし夕ぐれはさらでもつらき宿の秋かぜ

同比當座

山路苔

みやまぢや村雨とめぬかりのやに露あまりある苔のさむしろ

羇中夕

暮れぬともなほ行く末は空の雲なにをかぎりの山路なるらむ

同日當座

寄雨戀

おもひわび今宵もさてや山の端の月にしられぬ袖のむらさめ

寄水戀

消えかへりたれか岩もる水の泡のあはでも袖の色しみえねば

寄筆戀

わびつゝもかたみと思ひし筆の跡も今はかひなきすさびなりけり

同比當座

戀

あはれまた誰が見し夢のさめやらではては現の身を碎くらむ

うらみばや山の端ちぎる村雲のたえて世にふるよその月かげ

契りしやそれかとばかり峯の月いつのならひの暮を待つらむ

同比當座

春夕

みやこ人かへる山路はまよふらむかすみふきとけ峯の松かぜ

夏曉

ほとゝぎす旅寢のとこや明けぬらむ神なび山のよこぐもの空

秋朝

萩が花さきちる野邊の朝ぼらけおくらむ露をまづははらはじ

冬夜

袖の上もいくたびばかりしぐるらむものおもふ宿の有明の月

同比合詩當座

野亭月夜

狹筵やすゞのしのやの軒をあらみ月にもなれぬ夜床なれども

暮山紅葉

夕霧はなべてにしきをたつた山神よことふまつばらもなし

又夏比當座

夜深有水聲

雲かさね山の端しらむたきがはの水にはなるゝ夏の夜のつき

月かげによそなる雲もはらふらむ山の端過ぐる秋かぜのこゑ

同秋比當座

舟

伊勢嶋や波路くれゆく霧のまをほのかに過ぐるあまのつり舟

風

秋かぜやかつおく露をはらふらむかげはたまらぬ淺茅生の月

秋

秋の夜はあけがた遠くなりぬれど猶なかぞらに月やすむらむ

又當座

海月

あかしがた潮風さむく霧晴れて月に漕ぎ行くあまのつりぶね

野月

月の行く峰のうき雲吹きはらへ露にいかなる野邊のあらしぞ

九月十三夜内々詩歌合

山路月

山といへどさのみは露もおくものかぬるゝがほなる袖の月哉

ためしとも秋は今宵をながづきの名こそ山路の菊のうへの霜

同比秋十首會

ならはずよ寝覺は秋のうたゝねに昨日にもあらぬ風の音かな

秋はいまだあさぢが末のきりぎ〳〵すたへぬ泪ぞ色に出でゆく

おきて行くあかつき露のいかならむ鹿の音はらふ秋の山かぜ

吹く風は秋なきいろもひさかたの月にわするゝ涙のゆふぎり

袖の色よ秋しもいかにうつるらむ人もいくのゝ萩のしらつゆ

しぐれつるあとは夕日の色ながらよそに匂はぬ山の端もなし

霜はいまいく夜か袖にしきたへのまくらつれなくうつ衣かな

山姫のそめぬ袂もうつろひぬむらさめほさぬ四方のあらしに

ゆく秋を惜しむとすれば有明の月やどる袖もしぐれ晴れつゝ

ときは山秋にとまらぬ時雨にもさそはぬ色はまつかぜぞ吹く

同十月二十九日昨日大嘗會御禊を見て俊成卿の女「あ

まつ空日の御かげにもくもりなし萬代までの君がみ

そぎは」とよみて奉りけるに御返し

くもりなく日影も見えし冬の日にわれも千年の程はしりにき

同十一月比當座

秋野

尋ねばやむかしの跡はかはり行く世にもさがのゝ秋の夕ぐれ

野邊のつゆ花もほしあへぬ秋風をあだにうつさむ袖の色かは

同比當座

戀

時しもあれあだにしぐるゝ宵の雲ふけゆく月に恨みかねつゝ

同比合詩間詠勒字旅歌　當座

雲

今宵まづいかなる霜にぬれ〳〵てやどらむ宿もすゑのしら雲

嘯

故郷をたがおもかげにさそひ來て月にものおもふ夕ぐれの空

同比當座

薄暮戀

秋山の夕ゐる雲のいろに出でしうつるを人のこゝろとは見よ

故郷戀

待つ人のこゝろもしらぬふるさとになほ秋はてぬ蟲の聲かな

旅泊戀

わたつ海の我身こす浪いかに又うきねの袖のしをれそふらむ

關路戀

逢坂のゆふつけどりの聲ごとにそなたの風をなく〳〵ぞきく

海邊戀

なびけたゞ身を浦風の夕けぶり思はぬかたのたよりなりけり

同十二月九日會

行路夜氷

玉ぼこの道ふみしらぬわれからや袖さへ月のこほりなるらむ

鷹狩日暮

かりくれて鳥立もみえぬ雪の中にそれかと過ぐる天の川かぜ

來不留戀

大かたの月をや人のうらむらむさもあらましの宵のなごりに

同夜隱題各探而詠之　當座

直衣袖

冬もなほそでし□せる野邊の月四方の草木は霜がれにけり

藤壺紅葉

こけふかき軒端のいろに匂ひつゝ下葉はあをき庭のもみぢ葉

建保元年正月十日

竹添春色

春の日のながきよわたる色にまたみどりあらはす庭のくれ竹

同三月十八日閑院遷幸後初會内々

松浮池水

かすみよりやよひの池のふかみどり松とかぎらぬ春の色かな

同比良平卿大内の花見にまかると聞きて遣之

散りちらずいさしら雲の九重にいつかみゆきの春のさかりは

同比於水邊卽事　當座

おほゐがは春もあらしの山風に花のにしきのなかや絶えなむ

春ふかみ松のしづえに色そへてこずゑにかゝる池のふぢなみ

又當座

寄川戀

いつはりのおもはぬほかの名取川うき名とゞむなせゝの埋木

同比十體を人々分ちて詠之　當座

長高樣

忘れずよなほ山の端をかこちても契りし月のよそのおもかげ

幽玄樣

よしさらば身をば恨みじなか〳〵につらき習に思ひなしつゝ

同比當座

忘逢戀

わすれしはけふを待つべき契にて今更になるわがこゝろかな

思昔戀

すがの根のながき契となりにけりなれしむかしの袖の月かげ

同比當座

山路花

しをりせし［　　］春のこと問はむ花に幾世の袖かふれつゝ

竹裏鶯

ゆふまぐれ竹のは山はふかけれど聲よりあさき春のうぐひす

同日當座

春

梅が香もいまは春べとちる雪にまたや深山のふゆごもるらむ

もろ人は若菜つむめりかすがなるみかさの森の春のひかりに

この比はかすまぬ山もなきからにおのれおぼろの春の月かげ

同比當座

月前花

花の香にくもればくもるひさかたの空もうつろふ春の夜の月

雨中燈

雲かゝりふりそふ雨の暮のまにあらぬ色なるよひのともしび

同比當座

山路歸鴈

かち人の春のころもに消えぬなり鴈のつばさの峯のしらくも

山霞

みよし野のかすみ吹きまく山風にふるさと遠きありあけの月

野梅

きさらぎや野邊の梅が枝をりはへて袖にうつろふ春のあは雪

同比當座

暮春

花鳥のにほひも聲もとゞまらずこよひばかりの春のわかれに

曉戀

歸るさの袖をもおくるならひかな昨日待ち出でし山の端の月

又日當座

海邊晩霞

浦人のころもほすてふ春の日にうきてはなれぬ夕がすみかな

深夜春雨

月かげはなほありあけの雲(空イ)ながら軒端に晴れぬ春のむらさめ

同比當座

霞中聞鶯

家居する野邊の霞もうぐひすの鳴くなる聲はへだてざりけり

五月日戀十首

寄雲戀

秋の鴈はねうちかはすしら雲のなどなかぞらに誰を待つらむ

寄風戀

露しげみしたはふ葛の風だにもわが身のうへは恨みざりけり

寄雨戀

下萌のけぶりは空にあともなしおもふおもひのゆふぐれの雨

寄水戀

みなせ川した行く水のうたかたや岩間に忍ぶあはで消えなむ

寄草戀

おく山のゆふかげ草のつゆの袖うつらぬよりもつらき色かな

寄松戀

おきつ浪こずゑ吹きしく濱松の身をうら風のなにしをるらむ

寄竹戀

竹の葉に玉ゐる露の消えわびてぬるともなくて過ぐる比かな

寄衣戀

ころも手は田子の浦浪たゝぬまも大かた袖のぬれぬ日ぞなき

寄枕戀

草枕むすぶかりねの夢をだにいかに寢し夜としのばずもがな

寄簾戀

逢ふ事は玉のをすだれたまさかの隙こそしらね袖はぬれけり

同五月當座

曉待郭公

入る月の名殘に出でよほとゝぎすあすより先の忘れがたみに

泉邊晩涼

夏ふかき山井のしみづむすばずばいかばかりなる夕ならまし

又當座

秋

秋山の眞柴いろどる霜の上にうたてはげしく行くあらしかな

同七月夜當座

夜野蟲

夜をさむみ草むらごとに鳴く蟲の聲もや野邊の色に出づらむ

ながき夜をたへたる秋のけしきかな野原の露も蟲のうらみも

同比當座

七夕

天の河あさせしら波立つ霧のわたりもあへずあけむものかは

夕風

風よりや秋くるからの夕ぐれをかなしきものと思ひそめけむ

野薄

ひとりしも誰かいるのゝ初尾花たまくらよりぞ露は馴れける

田家

明けぬとや小田の假庵のひまをあらみ鹿の音近く吹く嵐かな

曉露

いにしへや我がまだしらぬ袖の露を誰しのゝめの道のさゝ原

同比當座

旅月

旅人のたもとを霧にしをりして月にぞこゆるさやのなかやま

山雪

かつこほるまきの葉わけにふる雪をはらひもためぬ冬の山風

同八月七日歌合

山曉月

月よなほ有明の山のしかすがに秋なくこゑのうらみてぞ行く

野夕風

夕露は野邊の花ずりころもでのぬれてのまゝに秋かぜぞ吹く

川朝霧

はらへたゞ宇治の川霧へだてゝもをちかたびとの袖の朝ぎり

同比歌合

野月

宮城野の木の間も色や月かげのこゝろづくしに秋かぜぞふく

山鹿

霧ふかきみやまがくれに鳴く鹿も聲の色にやあらはれぬらむ

同十日戀十首

音羽山

吹くかぜの音羽の山はいろづけど人のこゝろの秋ぞつれなき

小鹽山

あくるまもをしほの山の松にこそつらさの事も思ひしりぬれ

藏部山

くらぶ山まなくちるてふ花よりも我がこふらくの數やまさらむ

常磐山

君しのぶときはの山は秋くともいろに見ゆべき袖のうへかな（はイ）

葛城山

たまかづら葛城山の秋のいろやなれしもつらき人のおもかげ

三舟山

みよしの〳〵三舟の山の峯の雲かゝるおもひに立ちまよひつゝ

待土山

君をはやまつちの山の松とてもいくよつれなき色とかはしる

石瀬山

わが戀は人にもいまだいはせ山したゆく水のうちしのびつゝ

妹背山

いもせ山たがことの葉の秋にまたうつ(か)りやすきは心なりけり

淺香山

水の面にかげさへうつる淺香山あさきは人のちぎりなりけり

同八月十五夜

月前露

おほかたの草葉に月はやどりけり袖よりほかも秋のしらつゆ

月前風

月すめば何とあらしのふくならむうはの空にぞ秋はかなしき

月前祝

わすれじなこの比の夜の空(浦イ)の月またもむかしに思ひいづとも

同夜當座

浦月

浦人もしほたれて行く袖のうへにいたくなぬれそ涙の月かげ

野鶉

野邊の露はあだなる物と吹く風を身はならはしに鶉なくなり

夜戀

今更におもはじとてもいかゞせむくるゝ夜ごとの心ならひは

又日當座

朝見紅葉

いづる日も秋とみかさのやまのはに光さしそふ峯のもみぢ葉

山行伴鹿

さをしかのともなふ聲もやゝふけぬ歸る山路に月や出づらむ

同當座

山風

風吹けばむら雲まよふゆふ端山まなくみだるゝ秋のいろかな

忍戀

忍びつゝ色にや出でむあしびきのわがみやま木の時雨ふる比

同比當座

紅葉

もみぢせぬ松葉が霜はさもはらへそをだに山の秋のこがらし

同比當座

夕山鹿

秋といへば都のたつみしかぞ鳴く名も宇治山のゆふぐれの空

さをしかのなみだも秋はもる山の下葉のこらぬ夕しぐれかな

又當座

秋夕鹿

鹿の音になほ色さびしまさきたつ秋のみ山のゆふぐれのそら

深夜鴈

わぎも子があさのさ衣かりがねのなみだしも迷ふさやの中山

同當座

海濱戀

あかしがたおぼろ月夜の浦風も袖のほかにはしをれざりけり

曉郭公

ほとゝぎす鳴く一聲のむらくもにまだ宵ながらのこる月かげ

水上月

むすぶ手の雫も千代のかず〳〵に月はにごらぬ山の井のみづ

同比歌合當座

田家秋夕

かど田より山をかぎりに見渡せば稻葉にちかき夕づく日かな

山路曉風

置きまよふあかつきの露の袖の上をぬれながら吹く秋の山風

寄草戀

おく露の色には出でぬならひかな夏野の草のむすぼゝれつゝ

契忍戀

たのめつゝつらきはいとゞ思出もとがむるからに忍ぶ比かな

寄海戀

伊勢のあまのたくもの煙空にのみうきは思のならひなりけり

又當座

曉戀

有明の月ともなにかをしからむこれぞかたみの山の端のそら

又當座

寒野鹿

夜を寒みかれゆく野邊の淺茅にも思ひはたえず鹿ぞ鳴くなる

同九月十三夜歌合

江上月

玉江こぐあしがり小舟あとみえて水のあきとや月はすむらむ

旅宿戀

思ひつゝひとり旅寝の夢にだにみゆとは見えぬ人のおもかげ

暮山松

秋の色はとやまの山の夕時雨つれなき名のみなほやふりなむ

同月歌合當座

杜間鹿

秋を惜しむときはの杜に鳴く鹿の聲にまかせて降る時雨かな

寄濱戀

みくま野の浦のはまゆふかひもなし契もくつる袖のなみだは

寄舟戀

おきつなみ心もしらずゆく舟のたよりの風になにしをるらむ

同比當座

川上秋

立田川秋もゆふべの山おろしにもみぢをさらぬ涙のしがらみ

行く秋をしぐれし雲に吹きかへせけふだにつらきあすか河風

同月十九日

寄海旅

難波江やたみのゝ島になく鶴のあしべをさして宿もたづねむ

寄野戀

みやぎ野の小萩がもとの露しげみ風を待つまも人ぞこひしき

寄川雜

鈴鹿川ふるや時雨の色に出でゝおもふこゝろは神にまかせむ

同比當座

みよしのゝ山したかぜのふるさとを花よりぞもる春の夜の月

神まつる比にも今はならの葉の月にもれたるもとつ葉もなし

にほてるやさゞ波白き月のうへに秋ともふかず比良の山かぜ

もみぢする峯のあらしにふる物は月にくもらぬ時雨なりけり

草の原しも夜のあらしさむければ月より庭のあとはたえつゝ

まきの葉の色より出づる月影をあらそひかねてふる時雨かな

春秋のいくよの月もながめきてわすれしものを雲のうへびと

同比當座

述懷

つま木とるそま山人のしをりして道ある程のゆくすゑもがな

祝言

君が代にゆくすゑかけてしられけり松もちとせの契ありとは

同閏九月十九日歌合

深山月

月のいろも山の端さむしみよし野の故郷人やころもうつらむ

寒野蟲

あさぢふや床は草葉のきりぎ〳〵す鳴く音もかるゝ野邊の初霜

寄風雜

立田川流れもゆくかもみぢ葉のちらぬかげをも風にまかせて

同盡日亂歌合

原本脱闕。

いすゞ川ながれもたえず澄む月に千世のかずかく水のしら浪

關紅葉

逢坂のゆふつけ鳥のなみだにやよものこずゑの色かはるらむ

朝野霜

宮城野の草葉のいろも朝日かげさすや木の間の霜のむらぎえ

夕時雨

秋は今ゆふべの草のいろもうし時雨をいそぐ日ぐらしのこゑ

杜間霧

とゞめあへずしかもつれなく行く秋のときはの杜の夕霧の空

池邊菊

池水に老いせぬかげもしらぎくのなみの花にぞ秋はうつろふ

山寒草

あはれまた人めも草もかれにけりみやまの庵ぞ秋はさびしき

曉擣衣

よそにきく人もうらみや有明の月にまかせてうつころもかな

故郷風

宿はあれぬまがきはもとの跡ながら秋の野らなる風の音かな

閏九月盡

年のうちに秋くはゝれる暮をだに月日かぞへてものや思はむ

同比俊成卿の女出家すとて「君が代の春は千年といの
りおきてそむく道にもなほ頼むかな」「忘るなよ言の葉
におく色もあらば苔の袖にも露のあはれを」「捨てはつ
るこのよながらも故郷のしのぶの草にかゝる露かな」
とよみて奉りけるに御返し
いのりおく言の葉よりぞ残りけるいかなる春の露のかたみも
思ひいでむ昔をとはゞこたへなむそむく道にもありあけの月
この世をばさてもいかにと故郷のしのぶにたへぬ軒のしら露

同比當座

湖上旅

あしのねの一夜のまくらそれながらわするな夢のみつの島人

夜時雨

冬やこむ秋やゆかむのいざよひにわが衣手もうちしぐれつゝ

同比、の文字十ある歌とてよめる　當座

春の野のしのゝをすゝきつのぐみぬ子の日の松の緑のみかは

同日深沓冠　當座

櫻ばなさかりに見えし山の端のあらぬいろなる秋のゆふぐれ

同日花時鳥月雪を一首に詠める　當座

櫻ばな雪とちりにし木のまより月にやすらふほとゝぎすかな

同十月當座

時雨

峯の松月のかつらの木がらしもたゞ大かたに行くしぐれかな

同月八日當座

初冬霰

冬きぬとおとになたてそみやま木の色をあらはに霰ふるなり

曉山風

いまよりの有明の月やしをるらむわがかたしきのとこの山風

後悔戀

忘れしは今はたおなじ身のうきも人のうきには思ひたへなで

同比當座

關月

あふさかの關の清水のこがくれにおのれかげ見る秋の夜の月

秋月

露も袖にいたくなぬれそ秋の夜の長きおもひに月は見るとも

寄霜戀

いかゞせむ霜がれわたる淺茅生のおのづからだにとはぬ恨を

同十一月當座

池上冬月

池水にむすぶこほりのたえ〳〵にひかりをまがふ冬の夜の月

寄松祝言

君が代をなにゝたとへむたかさごの尾上の松の色かはるまで

同當座

霰

この里も霰ふりきぬしがらきのとやまのあらし雲さわぐらむ

同月當座

野徑霜

はらひゆく跡までつらきあらしかな冬もいく野の霜のした草

池時雨

暮れかゝる雲間も見えずしぐれきて聲をあらそふ池のさゞ波

隱唐綾戀歌

我ながらあやしくぬるゝ袂かなおもはぬころはかるゝ露かは

同十二月當座

江上朝雪

難波江のあしまいざよふ朝日かげあまぎる雪ぞ空にうつろふ

同二年正月四日當座

松添春色

春きてはしぐれもそめぬかた岡の松のうは葉ぞ色まさりゆく

山路梅花

かすがやま咲くやこの花梅が枝に春ともわかず雪はふりつゝ

同十二日

梅契多春

春をへて宿にまづさく花なればよろづ代かざせ雲のうへびと

同二月三日詩歌合

川上花

よしの河雪げの水の春のいろにさそふともなき花のしたかぜ

この比はちりかひくもるかげもあらじ花のかゞみの山川の水

野外霞

かへりみる都は野邊の朝がすみたてるいづくに若菜つむらむ

武藏野や枯れにしまゝに下荻のなかばぞかすむ雪のむらぎえ

同月廿三日高陽院殿より水無瀨殿の梅を御覩ぶたに

入れて御隨身秦賴弘をもて奉らせ給ふとて「水無瀨山

ほどは雲居にとほけれどにほひばかりは君がまにま

に」とよみて奉られけるに御返し

みなせ山ほどは雲居の春ながら千代のかざしの色ぞうれしき

同廿四日於南殿當座

翫花

もゝしきや花もむかしの香をとめてふるき木末に春風ぞ吹く

今日しもあれ何かはあだの名にたてむ花にまれなる雲の上人

春の日はながめてけふもくれなゐのうす花櫻いろに出でつゝ

同三月十日會

山落花

初瀨山うつろふころは春かぜのたゆむもしらぬ花ぞ散りける

暮春月

あすか川春さへはやく行く水に今日とくらして月を見るかな

曉增戀

これまではかねて思はぬなげきだにしのびかねつる有明の空

同日雅經朝臣八重櫻の枝にまりをつけて藏人康光が

もとに「春を惜しみ折る一枝の八重櫻こゝのへにもと

おもふあまりに」とよみてつかはしけるに御かへし康
光にかはりて
春を惜しみ折りつる花も九重におもふあまりの色はそひけり
同比當座
述懐
おく山の柴のした草おのづから道ある世にもあはむとすらむ
百千鳥鳴くなる春はいにしへにあらたまるとも猶やふりなむ
日をへても猶やたのまむ月讀のかはらぬ影にすまむかぎりは
同比四季鳥歌宛十二月也　當座
しら雪のふるすながらの鳥の音を梅咲くやどに春かぜぞ吹く
きゞすたつ草のはつかの旅衣つまもこもれるあさみどりかな
春がすみたづきもしらぬ山人の跡まどはせるよぶこどりかな
ほとゝぎすなくや雲まの夕づく夜初卯の花のかげやしのばむ
槇の戸をあけてかひなき人めをば夜半の水鶏を頼むなりけり
夏の夜もやみはあやなしうかひ舟さしてぞしるき篝火のかげ
秋はなほものおもふ宿の萩が枝に鴈のなみだの露やそふらむ
秋のあめふるの中道うつろひて尾花がもとにうづらなくなり
あきの夜は鳴のはねがきいくたびか月のまくらに衣うつらむ
いかるがやとみの小川の冬の月たえずや千代の影にすむらむ
沖つかぜ波もたかしのうら千鳥松のすゑ葉に八千代とぞ鳴く
はし鷹のとかへる山の松が枝にうはげやさむき雪のふれゝば
同比當座

春山

山ざくら霞のまよりうつろへば色のちぐさにはるかぜぞふく

大かたやかすみも八重のをしほ山春はみどりの色やそふらむ

川柳

水無瀬河やなぎの絲の春かぜにむすばぬ水もむすぼゝれつゝ

春の色やおほ川のべのやなぎ蔭しづえは波のもくづなりけり

神祇

すゞか川ふるきながれのめぐみかな山田の原の春のむらさめ

賀茂山や見しはやよひの花のかげこぞのみゆきに面影ぞたつ

同五月歌合當座

夏戀

新千載集第二句「身をうらせみの」に作る、

戀をのみしづえが下のわすれ水むすぶも人のちぎりなりけり

人しれぬ身はうつせみの木がくれて忍べば袖にあまる露かな

秋戀

おほかたにうき身ひとつの秋ならば誰ゆゑにかは物は思はむ

忘れぬやいかならむともしらぬまに誰まつ蟲の聲ぞかなしき

同七月〔二日〕歌合當座

初秋露

をぎ原や末葉の露もしられけりうき身ひとつの秋のゆふぐれ

野草花

萩が花さくらむをのゝあさ露にぬるゝばかりの袖のいろかは

夕山風

草葉にはあだにおもひしゆふつゆを衣手ならす秋のやまかぜ

雨後月

秋の雨の宵のむらくもあと消えてはらふあらしに殘る月かげ

羇中戀

いのちやはあだのおほ野の草枕はかなき夢もをしからぬ身を

同比當座

七夕

七夕の星あひの空のぬれごろもまどほに秋のけふを待ちつゝ

山

鴈がねもいまやこゆらしやましろの岩田のをのに秋風ぞ吹く

海

すみよしの浦より遠になりにけり月みるにしのあはぢしま山

同比歌合當座

春江月

しめおきしたま江のまこもそれながら緑にかすむ春の夜の月

秋野蟲

風のおと露のかごとをうらみても野原は秋のまつむしのこゑ

初冬雪

大江山いく野の草のかれ〳〵にあらしのすゑにつもるはつ雪

寄螢戀

夏蟲の身のいたづらになりぬなり暮まつほどのあすか川かぜ

閑中雜

山賤のよをすみわけるすまひにもありふる程の道はありけり

同比於閑院南殿當座

詠月前松

いまはまた世々をかさぬる庭の松ふりてぞみゆる秋の夜の霜

同八月十五日

月前竹

竹の葉にみがけるたまの秋の月千代も八千代も枝ながらみむ

同十六日亂合

秋風

夜やさむき衣手うすしかたしきのまだ一重なる秋のおもひも

秋露

小山田のかりほの庵のとことはにわがころもでは秋のしら露

秋月

天つ空みちもやどりもしら雲の明くるもしらで月を見るかな

秋雨

みやぎ野の木の下つゆやいかならむ風に玉まく秋のむらさめ

秋鴈

たがために來る秋風のことづてもなみだぞおつる初鴈のこゑ

秋蟲

秋の野の尾花ふきちる風のうへにありかさだめぬ蟲の聲かな

拾遺風體集第二句「尾花ふきしく」に作る、

秋鹿

みむろやま下草かけて鳴く鹿のこゑよりしげきあかつきの露

秋花

袖のいろは露のたまだにとゞまらですゝきも萩も秋風ぞ吹く

秋水

人くまぬいた井のしみづ里遠みむかしもいくよ秋ぞもりける

秋霜

もみぢ葉はふりみふらずみおく霜のさえゆく霜に秋風ぞ吹く

秋祝

ゆくすゑを思へばひさしをとめ子が袖ふるやまの秋の夜の月

萬代集第一句「行末も」に作る、

秋旅

都をばよそにだに見ずさゝのくまひのくま川の秋のゆふぐれ

秋戀

わすればや風はむかしの秋の露ありしにも似ぬ人のこゝろに

秋懷

秋もあき月も雲居のそれながらむかしを今におもひかねつゝ

秋雜

たかさごの松にすむべき今よりや尾上の霜のひかりそふらむ

同比當座

かぎりあればきのふにまさる露もなし軒のしのぶの秋の初風

月みても秋のあはれはあるものをしづ心なくうつころもかな

龍田山よそのもみぢや散りにけむ松の葉もなき峯のこがらし

又當座

冬柳